

英文学会誌

English Department Journal vol.53

第53号

ROYALTY ON THE MISSISSIPPI:

AS CHRONICLED BY HUCKLEBERRY FINN.*



THE RAFT.

宮城学院女子大学学芸学部英文学会

Miyagi Gakuin Women's University

2025年 3月

表紙挿絵タイトル：ROYALTY ON THE MISSISSIPPI: AS CHRONICLED BY HUCKLEBERRY FINN
作者：Duncan
出版年：1890 年
サイズ：1552×1939 px (13.14×16.42 cm)
© Getty images

英文学会誌

第53号

2025年3月

目次

Timothy Phelan 先生・清水菜穂先生のご定年に寄せて お二人の先生の定年を記念して・・・・・・・・・・	3
吉村典子 国際交流の体現者―フェラン先生・・・・・・・・・・	4
中津将樹 清水先生のご定年に寄せて ～感謝と祝福のメッセージ～・・・・・・・・・・	6
伊藤 睦 清水先生へゼミ生からのメッセージ・・・・・・・・・・	8

* * *

研究ノート

定名詞句の解釈と統語構造との関係： 語彙的緊密性からの試論・・・・・・・・・・	13
増富和浩 グローブ座へのアクセス ――『アントニーとクレオパトラ』 (2024年夏、シェイクスピア・グローブ座)・・	29
酒井祐輔	

映画『私だけ聴こえる』上映会開催報告書・・・・・・・・	48
間瀬幸江	

* * *

英文学科生の活動

ESL (English Speaking Lounge)・・・・・・・・・・	84
1年 佐藤愛莉 2年 工藤まりん 長期留学報告・・・・・・・・・・	87
ウィニベグ大学 3年 遠藤みゆ ウィニベグ大学 3年 大場晶夢 イギリス研修報告・・・・・・・・・・	91
3年 北島愛里 3年 窪田幸穂 4年 菅彩乃 4年 高橋綾佳	

* * *

2024 年度英文学科活動報告

教員研究・教育活動報告	100
英文学科講義題目	114
英語英米文学専攻講義題目	117
卒業論文題目	118
英文学会活動報告	122

* * *

English Certification ―私の勉強法―	126
-------------------------------	-----

* * *

編集後記	131
------	-----

フェラン先生・清水先生の ご定年に寄せて



お二人の先生の定年を記念して

英文学科長 吉村 典子

2024 年度に、英文学科の Timothy J. Phelan 先生と清水菜穂先生が定年をお迎えになられます。

Phelan 先生は、2023 年 4 月に本学英文学科教授に着任されました。本年度で僅か 2 年ではありますが、もう何十年も本学にいらっしゃるような気がしてなりません。それは、ご着任早々、英文学科のことから大学全体の運営に至るまで、多方面で宮城学院の発展に寄与されたことに因るでしょう。国際交流委員会委員長就任後は、本学の国際交流の推進に奔走され、台湾の教育機関との友好的な関係を築き上げられました。英文学科では、英語基礎科目に加え、「異文化理解」のセミナーを開講され、常に「満席」という大人気ぶりで、多くの学生をご指導くだっています。

清水先生は、1996 年から本学の非常勤講師として、英文学科の様々な授業をご担当いただきました。その丁寧かつ専門的なご指導から、教育学科、さらには大学院科目もお持ちいただくことになり、たくさんの優秀な学生を輩出くださいました。こうしたご功績、そして学生の強い要望から、2020 年には本学の特命教授に就任され、卒業論文から修士論文に至るまでご指導くださいました。専門的な知識の習得のみならず、問題意識をもって主体的に取り組むことのできる学生を、愛情込めて鍛えあげてくださり、先生のご指導から「前に進む勇気を持てるようになった」という学生たちの声がよくきこえてきます。

お二人の先生の日々のご様子やご活動については、このあとに続く国際交流センター主任の中津将樹先生や学生・卒業生たちからのメッセージに表れています。Phelan 先生も清水先生も、2025 年度からも引き続き授業をご担当くださいますが、英文学科の歴史に刻むべきお二人のご功績を、ご定年の節目となる 2024 年度本誌 53 号に記して称えたいと思います。

国際交流の体現者ーフェラン先生

中津 将樹

ティモシー・フェラン先生は、国際交流の体現者です。

私は、国際交流に関心を持つ学生には、フェラン先生を「良い事例」として紹介しています。

その理由はいくつかあります。

第一に、言語が流暢なことです。フェラン先生を一言でいうならば、「日本語の上手なアメリカ人」。先生は自身を「日本語人」というように、日本語を日本人らしく話します。欧米人の多くが日本語を話す際の独特なアクセントや抑揚はなく、平坦に日本語を話します。表現も「てにをは」などの助詞の間違いも少なく、「ワンワン」などの擬音語や「ワクワク」などの擬態語いわゆる「オノマトペ」も理解しています。英語を話しているフェラン先生を見て、「ネイティブ並みに英語が上手だ」と勘違いしてしまうこともあるほどです。私は、留学にせよ観光にせよ海外に行く際には、その国の言語を話すことができるほうが充実した生活を送ることができると思いますが、先生と接していると、まさにそれを自身で実践していると感じます。

第二に、積極性があることです。フェラン先生は学生に積極的に話しかけています。「言葉」は使わないと忘れてしまいます。言語の上達のためには、その言語を積極的に使うことが重要です。前述の先生の流暢な日本語は、日ごろからの積極的な他者への対応や言語の使用によるものに違いありません。国際交流においても、日本のことわざである「沈黙は金」は通用せず、積極的なコミュニケーションが必要です。

第三に、比較の視点を持っていることです。フェラン先生は、本学赴任前は宮城大学で長年国際交流の要職を務めておりました。私は先生と国際交流の業務を一緒に行い僅か1年ですが、宮城大学でのさまざまな実践例

を知ることができました。本学の国際交流を宮城大学の場合と比較することにより、それぞれの特徴、長所を明確に認識することができました。私たち日本人が海外に行けば、日本に関し質問されることが多くあります。自分の母国に関する知識の欠如に気づきます。しかし、海外と日本の場合を比較して説明できるならば、相手からの評価も高まり、自分自身にも自信がつき、それぞれの良さを知ることになり、相互理解に繋がります。また、比較の視点は海外での生活のみならず、仕事や学問の場でも重要な要素です。

第四に、多才なことです。特に、トランペットは天下一品です。昨年、定禅寺ジャズフェスティバルでフェラン先生の演奏を視聴しましたが、そのパフォーマンスは私の想像以上であり、まさに「ティモシー・ライブ・イン・定禅寺」でした。私は学生に「海外で楽器やスポーツなどのパフォーマンスを披露すれば、たとえ言葉ができなくとも、向こうから人が寄ってくる」と授業で言ったことがあります。「ライブ」で先生が多くの人に囲まれていたことは、これを証明するものです。

このように考えるならば、国際交流を行う際には、言語を修得し積極的に相手とコミュニケーションをとり、その際には比較の視点を含めながら会話を進めることが重要であり、時にはそれぞれの特長を駆使することが語学力を補い潤滑油の役割を果たすのです。それを見事に体現しているのがフェラン先生なのです。

ところで、私はこれまで国際交流委員会や国際交流業務において、フェラン先生よりさまざまな知見をいただくことが多かったのですが、それでもまだ先生についてわからないことがあります。それは先生のアイデンティティです。「国際交流をする際には自らのアイデンティティをしっかりと持つことは重要だ」と力説したいのですが、私は先生がアメリカ人であるにもかかわらず、思考様式、行動様式が日本的だと感じるものがしばしばあります。遠回しな表現の使用や事前の根回しなど日本人並み、いや日

本人以上に気を遣っているなあ、と感ずることがあります。アイデンティティは母国アメリカなのか、それとも現在居住している日本なのか。これはまだ先生との付き合いがまだ1年足らずの私にとっての「未知の分野」です。

幸いなことに、フェラン先生は4月以降も本学で授業を担当していただけるとのこと。つまり、私にとって上記の未解決案件を解決するための時間はまだあるようです。

そうであれば、とりあえず今回のフェラン先生の定年退職は、先生にとっての「一つの節目」と勝手に位置づけたいと思います。

フェラン先生。これまでの長期にわたる教育や研究、おつかれさまでした。また、国際交流業務に関するご貢献、ご指導やご鞭撻、ありがとうございました。そして、今後もよろしくお願いいたします。

清水先生のご定年に寄せて～感謝と祝福のメッセージ～

伊藤 睦

清水先生、ご定年おめでとうございます。長年にわたりご活躍された清水先生に、心より感謝とお祝いを申し上げます。ご定年の知らせを受け、感謝の気持ちをお伝えしたく、このメッセージを書いております。

清水先生には、セミナー、卒業論文、修士論文のご指導をいただきました。アメリカ文化の奥深さを教えてくださった先生の講義は、単なる知識の提供にとどまらず、新しい視点を与え、広い世界を見る力を養ってくださいました。また、文学作品を通じて、単に物語を読むだけでなく、作家の思いや、時代背景、社会的な文脈を深く理解することの重要性を学びました。歴史や文化、文学、社会背景がどのように織りなされるかを学ぶ中で、アメリカ文化の多様性やその魅力を深く理解することができました。

先生の講義では、ディスカッションや批判的思考が重視され、学生一人ひとりが自分の意見を持ち、それを表現する力を養うことができました。特に印象に残っているのは、文献だけでなく、映像や音声、先生ご自身が撮影された写真など、さまざまな資料を交えながら、いつも情熱的に語られていたことです。そして、私たち学生一人ひとりに対して丁寧に向き合ってください先生の方針にも、大きな感銘を受けました。そのおかげで、学ぶ楽しさだけでなく、自分の可能性を信じる勇気を持つことができました。

また、先生の授業やご指導を通じて学んだのは、単にアメリカ文化や文学の知識だけではありませんでした。それ以上に、「探究心を持つこと」「常に挑戦し続けること」の大切さを教えていただきました。この二つの教えは、社会人となった今も私の道標となっています。

長年にわたり、多くの学生に知識とインスピレーションを与え続けてくださったことに、心より感謝申し上げます。先生が築いてくださった学びの場は、私たちにとって特別な場所でした。これからの道のりにおいても、先生が私たちに教えてくださったことを胸に刻み、歩んでいきます。

ご定年後も、新たな挑戦や人生のステージにおいて、ますますのご健康とご活躍をお祈り申し上げます。先生がこれまで築かれた功績や温かなご指導の記憶は、私たちにとって永遠に大切なものです。本当にありがとうございました。

清水先生へゼミ生からのメッセージ

■浅野 帆南

ご定年おめでとうございます。私は、授業をする際にいつも目を輝かせてお話される先生のお姿を見て、私もアメリカ文化について学びたいと思い、清水ゼミを選択しました。卒業論文では、ゼミ生が様々なアメリカ文化を題材とする中で、親身に一人一人に寄り添ったご指導をしていただき、ありがとうございました。先生から学んだことを胸に、就職後も精進してまいります。末長いご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。

■猪俣 桃香

4年間、授業やゼミで大変お世話になりました。清水先生の厳しいながらも、とても身になるご指導に大変感謝しています。お身体にお気をつけてお過ごしください。4年間ありがとうございました。

■小野寺 凜

清水先生の授業を受講してから、私はアメリカについてより興味を持つようになりました。「ゼミは絶対に清水先生がいい！」と思うようになりました。先生の最後のゼミ生になって、先生のご指導のもと、ゼミ生全員が素晴らしい卒論を提出することができたこと、光栄に思っています。ありがとうございました！

■川村 理子

清水先生の講義を通してアメリカの文化や文学に触れたことで、これまでよりもさらにアメリカ文化に興味を持つようになりました。特に黒人文化については新しい学びが多く、楽しみながら講義を受けていました。ゼミでも丁寧にご指導いただき、とても感謝しています。4年間本当にありがとうございました。これからもお身体に気をつけてお過ごしください。

■黒川 莉那

ゼミでは、先生に会うとやる気が出て、最終的に卒論を書き終えることができて良かったです。熱心にご指導いただきありがとうございました！また、授業終わりに雑談するのが楽しかったです。

■佐藤那奈佳

清水先生、今までご指導いただきありがとうございます。ゼミを選択する際、迷うことなく清水先生のゼミを選択しました。清水先生の支えがあったからこそ、今の私がいます。本当にありがとうございます。清水先生の今後のますますのご健勝とご多幸を心よりお祈りいたします。

■下田麻梨乃

この度は、ご定年おめでとうございます。面白いお話を交えた清水先生の講義やゼミは楽しく、多くの学びがありました。特に論文執筆では、物事を計画的に進めることの大切さを教えていただきました。4年間ご指導いただけたことを大変光栄に思います。これからもどうぞお元気で過ごしてください。

■田原 捺季

清水先生、この度はご定年おめでとうございます。どんなにお忙しくても、一人ひとりに真摯に向き合い、常に厳しく温かく指導してくださったこと、大変感謝しております。これからは、お身体にお気をつけて、充実した第二の人生を送られますよう心よりお祈りしています。

■千葉 望央

長年のご指導、お疲れさまでした。清水先生が授業でユーモアを交えながらいろいろなお話をして下さるのが面白く、いつも授業が楽しかったです。

す。また、ゼミでも大変お世話になりました。たくさんのアドバイスをいただいたおかげで、納得のいく卒業論文を書くことができました。清水先生のゼミで良かったと思っています。ありがとうございました。

■細川 晃菜

清水先生、お世話になりました。先生の授業を受けたことがきっかけで、アメリカ文化について興味を持つようになりました。卒業論文ではたくさんのご指導をいただき、ありがとうございました。今後ともお身体にお気をつけてお過ごしください。

■萩野 花香

長い間お疲れ様でした。また、長年のご指導ありがとうございました。私は、2年時の授業からお世話になりました。先生の授業はとても分かりやすく、プリントには書かれていない豆知識のような、アメリカに関する多くのことを楽しみながら知ることができました。また、ゼミでは卒業論文や基礎ゼミレポートを書く際にアドバイスをくださり、ありがとうございました。先生のアドバイスのおかげで最後まで書き上げることができました。これからもお身体にお気を付けてお過ごし下さい。

2024 年度 研究ノート



定名詞句の解釈と統語構造との関係： 語彙的緊密性の観点からの試論

増富和浩

1. はじめに

英文中に定名詞句が含まれる場合、その定名詞句はその英文が用いられる文脈に沿って何を指しているかが決定され具体的な指示対象を持つ。一見すると、我々はこのような定名詞句の指示対象の決定を無意識に、そして容易く行っているように感じるかもしれない。また、このような決定の仕組みについては、「先行文脈においてすでに用いられた名詞句を指す場合には定冠詞等をともなう定名詞句が用いられる」といった経験的な説明がなされるかもしれない。例えば、(1)のような例の場合、先行する A の発話に *a dog* が含まれているため、B の発話の *the dog* の指示対象が A の発話の *a dog* であることは説明に難くないであろう。一方、(2)のような例の場合、状況はやや複雑だと考えられる。つまり、A の発話ではいきなり定冠詞が用いられているが、この定冠詞の指示対象は A と B の共有認識の中でどのように特定されるのであろうか。あるいは、A はなぜ B が *the dog* の指示対象を特定できると判断しているのだろうか。日常のコミュニケーションにおいては(2)のように、定名詞句の指示対象の決定の方式が不明確な場合も確認される。本稿ではこのような点に注目し、定名詞句の指示対象を決定するメカニズムを検討するにあたり、まず必要となる事実の確認と、そこから想定される議論の方向性について予備的な議論を行うことにする。

(1) A: I saw *a dog* in the park today.

B: Oh, what did *the dog* look like?

(2) A: *The dog* barked loudly last night.

B: *Dogs* around here bark a lot at night, don't they?

また、この問題を検討するにあたり、(3a)、(3b)のように、同一の名詞句が用いられる場合((3)の例では *dog*)であっても、「定か不定か」という名詞句の特性の違いにより文法性に違いが生じる例が観察されることにも注目する。(以下の例文中で、*を付した文は非文法的である。)例えば、(3)は存在構文(または、*There* 構文)の例で、不定名詞句が生じる(3b)は文法的であるが、定名詞句が生じる(3a)は非文法的である。このような現象は存在構文における「定性制限(definiteness restriction)」あるいは「定性効果(definiteness effect)」として知られている。

(3) a. *There was *the dog* in the park.

b. There was *a dog* in the park.

これらの現象が、単に文脈に依存した「定」か「不定」かという意味(あるいは解釈)に関連する問題であると考えれば、これらの文法性の対比を説明するためには、語用論的な考察方法、あるいは意味論的な考察方法が有効であると考えられる。しかしながら、詳細は後述するが、(3)の存在構文のような例の派生過程に「移動」などの統語的操作が関わっているとすると、定名詞句の指示対象の決定に関わるプロセスには、統語的(あるいは形態統語的)特性が関わっている可能性を指摘することができるだろう。

以上のような点を踏えて、本稿では、(3)に代表されるような英文の文法性を決定するメカニズムを議論することが、(1)や(2)の例も含めて、定名詞句の指示対象を決定するメカニズムの解明につながると考え、この問題に対して形態統語論的な観点から考察を行うことにする。なお、本稿の

議論は予備的なものであるため、結論において明快な解答を示すには至らないが、別稿において本稿で導かれた議論の方向性をさらなる考察につなげる予定である¹。

2. 事実と問題

本節では、定の解釈と統語構造との関係について具体的な議論に入る前に、まず定名詞句の解釈に関わる基本的な特性と、存在構文や右方転移構文が定名詞句を含む場合の派生過程とその文法性について概観することとする。

2.1. 英文における定名詞句の解釈について

本節では、日常の英語運用において観察される定名詞句の解釈の特徴について概観することにする。以下の具体例について考えてみる。いずれも A と B の会話を例として、日常的に使用される定名詞句の用例を示したものである。これらの例において、定名詞句の機能は簡単に言えば、A と B の双方にとって同定可能な指示対象を指すことであるが、各用例において具体的な指示対象の決定にはいくつかの方式が考えられるので、ここではそれらの方式について、指示対象の決定の仕組みを確認する。

(4) A: I saw a bird building a nest in my garden.

B: That's interesting! How big was *the bird*?

(5) A: I love listening to *the radio* while driving.

B: Really? I prefer listening to music on my phone.

¹ 本稿が掲載される『英文学会誌』の読者には、在学生や卒業生が含まれると考えられるので、過度な専門用語等の使用は控えてできるだけ平易で明快な説明を心掛ける。引用資料の選定についても大学図書館やインターネット等で入手できるものを中心に提示することとする。本稿が3年次の「英語学基礎セミナー」や4年次の「卒業論文」の作成等の参考になれば幸いである。

(6) A: Did you see the moon last night? It was bright!

B: Yes, I even saw a shooting star near it.

(7) A: I like *the book* you lent me.

B: Oh, thanks! I hope you enjoy the journey in the book.

(8) A: Can you close *the door*, please?

B: Sure. Oh, by the way, I found a key on *the floor*.

まず、(4)の例においては、初出の名詞句 *a bird* とそれを特定の名詞句として指示するための *the bird* が用いられている、つまり、最初に A が *a bird* と言った際には、話者 A が特定の鳥について言及していないため、不定冠詞 *a* が用いられている。B がそれに対する返答として、*the bird* と言ったときには、A の発話における鳥を指しており、特定の鳥について言及しているため定冠詞 *the* を使用している。(5)に示す例では、A の発話における *the radio* は個別のラジオを意味しているわけではなく、一般的な意味で「ラジオ放送」というカテゴリー全体を指している。一方、B の発話における *my phone* は自分の携帯電話について言及しており、定名詞句であるが *the* ではなく所有格代名詞 *my* を用いている。

また、(6)は、唯一の存在を示す定冠詞と、不特定の1つの流れ星を指す不定冠詞が用いられている例である。A が用いている *the moon* は、地球にとって1つしか存在しない月を指しており、唯一の存在を特定するために定冠詞 *the* を用いている。B の *a shooting star* は、話者が特定の流れ星ではなく、無数に存在する中の1つを指しているため、不定冠詞 *a* が用いられている。(7)は、具体的な名詞と比喩的な名詞の対比を示す例である。A の発話に用いられている *the book* は、進行中の B との会話の中で特定される具体的な物(A が借りた本)を指すために *the* を用いており、B の「*the journey*」は、本を読むことを比喩的に「旅」と表現しており、一般常識および一般的な経験に照らして同定可能と考えられる事柄を指して *the* が

使用されている。

さらに、(8)も文脈により特定される指示対象を示すために定冠詞が用いられているが、AとBが共有する文脈、すなわち2人の会話が行われている場所や環境に付随するものとしてドアや床に対して the door および the floor が使用されている。Bの a key は、まだ共有していない新しい情報をAに対して提示しているため、不定冠詞 a を使用している。

以上のように、定冠詞 the の用法は、定冠詞が付加された名詞句がそれぞれの文脈の中で定性を獲得する方式によりいくつかに分類されるが、いずれの場合も the の使用により、個々の用例の参与者にとって、名詞句に関する共有情報を明確にする機能を果たしている。このような点を踏まえると、定名詞句の指示対象を決定するメカニズムは、文脈との関係を論じる語用論や意味論の分析手法が直感的には当てはまるかもしれない。しかしその一方で、次節以降で示すように、定冠詞が生起する文の文法性には、移動などの統語的要因が関わっていると考えられる現象が観察されている。

本稿では、これらの論点を踏まえながら定名詞句の解釈の問題に対して形態統語論の観点から議論を続けることにする。

2.2. 存在構文(There 構文)における定性効果

前節で定冠詞の主な機能について概観したが、定冠詞を分析する上で興味深い特徴を観察することができる構文がある。(9)に示した例は存在構文と名詞句の定性との関係を示しており、この構文の意味上の主語(斜字部)が不定名詞句であれば容認されるが、定名詞句の場合は容認されないか、容認度が低いとされている。この現象は定性制限と呼ばれている(Milserk, 1974 他)²。以下の例は、小田(2012)からの引用である³。

² 定性制限(Definiteness Restriction)は、定性制約あるいは定性効果と呼ばれることがある。

³ これらに相当するフランス語の例でも同様の文法性の対比が確認される(小田, 2012)。

- (9) a. There is *a cat* by the window.
b. There are *some books* on the shelf.
c. *There is *the cat* by the window.
d. *There is *this book* on the shelf.
e. *There is *Marion* in the kitchen. (小田, 2012)

このように定名詞句を排除する構文が存在することは、定名詞句の特性を明らかにする上で非常に重要な手がかりとなる可能性がある。そこでまず、存在構文の派生過程に関する分析を概観しておく。Chomsky (1995) 他の分析では、(10a)の存在構文は(10b)に示す派生の途中段階では、意味上の主語 *a man* は動詞句(verb phrase: VP)内にあり、この段階では格が認可されていない。存在構文に生起する動詞は自動詞 *be* であるため、動詞句内では対格(accusative: Acc)の付与が行われず、(TP 指定部で行われる)主格(nominative: Nom)の付与も行われなかったためである。このままでは「音形を持つ名詞句はすべて格を付与される」ことを要求する格フィルターの違反となり非文法的である。

- (10) a. There is *a man* in the room.
b. There [_{VP} is *a man* in the room].
[no Case]

Chomsky (1995)では、この状況を回避し派生を完了するために、意味上の主語 *a man* は TP 指定部に繰り上がり *there* に付加すると仮定されて

-
- (i) a. Il y a *un chat* près de la fenêtre.
b. Il y a *quelques livres* sur l'étagère.
c. *Il y a *le chat* près de la fenêtre.
d. *Il y a *ce livre* sur l'étagère.
e. *Il y a *Marion* dans la cuisine.

いる。there は接辞的な特性を持った虚辞であるため意味上の主語 a man による語彙的な支えが必要であることが、意味上の主語の移動を駆動する要因であると説明されている。この結果、(11a)に示す構造が形成され、意味上の主語 a man は主格の認可位置にあることにより、適正に主格を付与され格フィルターの違反が回避される。

- (11) a. [_{TP} *a man* _i-There [_{VP} is *t_i* in the room].

[Nom] 

- b. *A man there is in the room.

- c. There is a man in the room.

なお、(11a)の移動により(11b)に示すような語順の問題が生じると考えられるかもしれないが、Chomsky (1995)他では(11a)の意味上の主語の移動は発音に必要な音韻情報が確定された後、主に意味解釈に関わる派生が継続している段階(LF)で行われる非顕在的な移動であると考えられているため、実際の語順には影響がなく(11c)のように適正に発音されと考えられている。一方で、意味上の主語((11)では a man)の内部構造には変化が生じていると考えられ、このことが定名詞句を含む構文における文法性に関わっていることを3節で再び議論することにする。

2.3. 右方転移構文

英文中に含まれる名詞句が定であるか不定であるかによって文法性に違いを生じる例として、以下の例も考えてみる。これらは右方転移構文と呼ばれる例であるが、これらの例では、文末に用いられた名詞句(太字部)と前半の節内に生じる代名詞(斜字部)との間には、カッコ内に示すような解釈上の関連付けがなされている。右方転移構文では定冠詞や所有格代名詞をとともう名詞句や固有名詞などが文末に生じる場合は文法的であるが、

不定名詞句の場合は非文法的とされる⁴。以下の例は小田(2012)からの引用である。(例文中の太字は本稿が独自に付したものである。)

- (12) a. I know *him*, **the president of France**. (him = the president of France)
 b. I know *him*, **your supervisor**. (him = your supervisor)
 c. I know *her*, **Anna Faure**. (her = Anna Faure)
 d. *I know *him*, **a teacher of French**. (him = a teacher of French)
 e. *I know *them*, **some teachers of French**. (them = some teachers of French)

これらの構文の派生過程については、いくつかの分析方法が提案されている。主な論点としては、派生過程に移動操作(右方移動または左方移動)が関与しているかどうかである。本稿ではそれらの分析の例として、Whitman(2000)と鎌田(2009)の分析を概観することにする。

Whitman(2000)に基づけば、(13a)の右方転移構文は、概略(13b)の複合節構造より派生される。(13b)の派生構造において、後半の節 S2 の *those students* が左方移動により S2 に付加し、S1 に後続する語順となる。次に、S2 内に残っている動詞句 *are hard workers* は前半の S1 内の要素との同一性を条件に削除され、(13a)の右方転移構文が派生されると説明されている。したがって、Whitman(2000)の分析は、左方移動と削除操作に基づいている。(13b)の取り消し線が付された部分は削除されたことを示す。)

⁴ 存在構文の場合と同様に、これらの例が示す文法性の対比についても小田(2012)がフランスでも観察されることを示している。

- (i) a. Je le connais, *le président français*. (le = le président français)
 b. Je le connais, *ton directeur d'études*. (le = ton directeur d'études)
 c. Je le connais, *Anna Faure*. (la = Anna Faure)
 d. *Je le connais, *un professeur de français*. (le = un professeur de français)
 e. *Je les connais, *quelques professeurs de français*. (les = quelques professeurs de français)

(13) a. *They're* hard workers, **those students**.

b. [_{S1} *They're* hard workers], **those students** ; [_{S2} *t* ; ~~are hard workers~~]

一方、鎌田(2009)に基づけば、右方転移構文は、文末に生じる名詞句が移動ではなく他の要素と同様に派生過程で外的併合(External Merge)により構造に組み込まれると分析している。例えば(14a)の例は、(14b)の構造が示すように、問題となる名詞句 *the janitor* が主節の CP に外的併合により付加されることで派生されると説明している。鎌田(2009)は右方転移構文に対する移動分析にはいくつかの問題点があると指摘し、(14b)に示すような移動を伴わない分析の妥当性を主張している。なお、この構造において代名詞と文末の名詞句とが同一指示の解釈を受ける仕組みについては、独自の認可条件を提案しているが、本稿の議論には直接関係しないため言及しないこととする。

(14) a. The cops spoke to *him* about that robbery yesterday, **the janitor**.

b. [_{CP} [_{CP} The cops spoke to *him* about that robbery yesterday] **the janitor**]

2.4. 問題の所在

以上を踏え、存在構文と右方転移構文の派生過程とその文法性に注目すると、本稿の議論にとって興味深い点が確認される。具体的には、存在構文においては定名詞句の生起は容認されないのに対し、右方転移構文においては定名詞句の生起が容認される一方で、不定名詞句の生起が容認されない。なぜこのような文法性の対比が観察されるのだろうか。また、本稿の議論において、この違いはどのような意味を持つのだろうか。

いずれの構文においても移動操作が関与している可能性があり、存在構文は左方移動により派生されるとする分析をみた。右方転移構文に関して

も、移動を想定しない分析の他に、左方移動が関与しているとする分析を概観した。このような移動操作の有無が定名詞句あるいは不定名詞句の生起することによる文法性の対比にどのように関わっているのだろうか。

一方、そもそも定名詞句および不定名詞句が示す特性は、名詞句の解釈に基づくものであるので意味解釈の問題として語用論あるいは意味論の領域で取り扱うべきとの指摘がある。つまり、前の2つの小節で議論した存在構文と右方転移構文の文法性も統語派生後の意味部門に関連する要因により判断されるべきであり、統語部門あるいは形態部門の問題ではないということである。確かに定の解釈、不定の解釈の区別は、「話し手が談話に登場させる名詞句は、聞き手が初めて耳にすることもあれば、すでに知っている情報であることもある。聞き手にとって何(どれ)のことであるかがわかる名詞句は定であり、何(どれ)のことであるかがわからない名詞句は不定である」(小田, 2012)とされる。もしそうであるならば、統語的な要因は関与する余地はないかもしれない。

しかしながら後述するように、本稿では統語部門および形態部門での派生過程が定性を創出する構造の構築に関わっており、「定の解釈」の基盤となる構造を形成していると考えている。この考え方は、統語構造をもとにして音韻解釈(発音)と意味解釈(意味)が決定されるとする生成文法の基本的な考え方に沿ったものである。具体的な糸口は、現在のところ存在構文や右方転移構文の派生過程を詳細に確認することで得られる可能性がある。特に、移動操作の様式(あるいは、移動操作の有無)が文法性の違いに関わっていることが確認され、さらに定名詞句の内部構造にも変化が生じていることが確認されれば、それは統語部門(および形態部門)との関連性を示すこととなり、本稿の取り組んでいる問題の解決には、語用論や意味論の視点だけでなく、形態統語的特性に注目することで問題の所在を明確にできるのではないだろうか。このような点から、次節では形態統語論的な観点から、存在構文と右方転移構文の派生過程を再検討することにする。

3. 考察：形態的緊密性と定名詞句の解釈について

本節では、定名詞句の指示対象の決定メカニズムについて検討する。具体的には、上述の議論をもとに、定名詞句の生起が容認されない存在構文の派生過程と、定名詞句の生起が義務的な右方転移構文の派生過程について、語彙的緊密性(lexical integrity)の観点から再度考えることにする。

語彙的緊密性の原理とは、概略「統語法が語の内部の構造を操作したり参照したりすることはない」というものである⁵。英語では、例えば以下のような例が語彙的緊密性の違反となり非文法的であると説明できる⁶。

- (15) a. *[**teeth** brush] (cf. toothbrushes)
 b. *a **very** [**blackboard**] (cf. a large blackboard)
 c. *[unhappi-**er**-ness] (cf. unhappier, unhappiness)
 d. ***Truck** is what he likes a [____ driver]. (Fábregas and Scalise, 2012: 121)
 (cf. Trucks are what he drives ____.) (Fábregas and Scalise, 2012: 121)
 e. *[my maternal_i aunt_j] wanted her_i to live here (Postal, 1969: 206)
 (cf. my mother_i's sister_j wanted her_i to live here) (Postal, 1969: 206)

(15a, b)はいずれも複合語として[]内では緊密性が保たれなければならないため、tooth のみを複数形することや、black のみを very により修飾することは語彙的緊密性の原理に違反し非文法的と考えられる。(15c)の unhappiness は派生語として緊密性が保たれなければならないが、内部の happy のみを比較級にすることは語彙的緊密性を破ることになり非文法的と考えられる。(15d)においては、複合語の truckdriver の内部から truck のみを取り出し主節の主語としたことにより語彙的緊密性の原理に違反し非

⁵ 語彙的緊密性の詳細については、Anderson (1992: 84)などを参照されたい。

⁶ (15)において[]は語としての緊密性を示している。(c)–(e)の引用例の[]は本稿が独自に付したものである。なお、()内には文法的な類例を参照用として示す。

文法的となる。さらに、(15e)では、複合語 *maternal aunt*(母方のおば)の一部の *maternal* と *her* が同一指示を持つという解釈が、やはり語彙的緊密性の原理に違反し容認されない。

さらに、下の例が示すように、定名詞句に対しても一種の緊密性の原理が関わっていることを示唆する現象が観察される。(I I は上述の例と同様に緊密性が保たれる領域を示している。)

- (16) a. *Whose did you steal [_{NP} ____ money]? (鎌田, 2009: 133)
b. *Who did you see [_{NP} the picture of ____]?
c. Who did you see a picture of?

(16a)は、例えば *his money* のような「所有格代名詞＋名詞」からなる定名詞句から、所有格代名詞の部分のみを疑問詞に置き換えた疑問文を作ることができないことを示している。また、(16b)は、例えば *the picture of John* などの定名詞句の *of* の目的語のみを疑問詞に置き換えた疑問文が容認されないことを示している。一方、(16c)は(16b)と同様の操作であっても不定名詞句の場合は容認されることを示している。

このような事実を見ると、定名詞句にも語彙的緊密性と同様の原理が適用されていることが推測される。本稿ではこのような緊密性を仮に「定の緊密性」と呼ぶことにする。本稿でもすでに確認したように、定の解釈は、何らかの形で先行文脈にアクセスし、問題となる定名詞句の指示対象が決定されることで成立する。このとき、定名詞句からその一部の要素を取り出したり、あるいは本来含まれていなかった別の語彙的要素を追加したりすると、問題となる定名詞句と先行文脈の指示対象との関係が崩れ、適正な指示関係が成立しないという事態が予測されるのではないだろうか。このような状況を避けるために、定名詞句には「本来の語彙的要素からなる緊密性が確保されなければならない」という一種の原理が想定できるので

はないだろうか。

以上の点を踏まえて、存在構文の派生過程と右方転移構文の派生過程を「定の緊密性」の観点から再検討することにする。(以下では、存在構文と右方転移構文の派生過程について、現在の議論に関係した部分のみを示すことにする。)

(17) a. $[_{TP} \text{ a man } _i\text{-There } [_{VP} \text{ is } t_i \text{ in the room}]]$. (= (11a))

[Nom] 

b. $[_{TP} \text{ the man } _i\text{-There } [_{VP} \text{ is } t_i \text{ in the room}]]$.

存在構文では(17a)に示すように、派生の終盤に意味上の主語である不定名詞句が TP 指定部の *there* の位置に非顕在的に移動し主格を付与されることで、格の要請を満たし派生が完了することをすでに確認した。ここで仮に、*the man* などの定名詞句が存在構文の意味上の主語として生起した(17b)を考えてみると、(17a)の場合と同様に *the man* が *there* の位置に移動すると考えられる。このとき定名詞句の構造はどうなるのであろうか。

(18) $\text{there} + [_{NP} \text{ the man}] \Rightarrow [[_{NP} \text{ the man}]\text{-there}]$

([] は緊密性が保持された状態、[] は緊密性が崩された状態を示すことにする。)

もし(18)のような構造になるとすると、定名詞句の構造の内部に *there* が付加されることにより、おそらく本来確保されていた定名詞句 *the man* の緊密性が崩され、先行文脈における指示対象と適正な指示関係を結ぶことができなくなるのではないだろうか⁷。この結果、定名詞句が存在構文に

⁷ もちろん、(i)のように緊密性が保持された状態で *there* と結びつく可能性が考えられる。

(i) $\text{there} + [_{NP} \text{ the man}] \Rightarrow [[_{NP} \text{ the man}]\text{-there}]$

ただし、Chomsky (1995)は、*there* が接辞的な要素であると指摘していることを踏まえると、(18)

生起することが容認されないと説明できるであろう。つまり、定性制限の効果は、「定の緊密性」の観点から説明できるのではないだろうか。

次に、右方転移構文において定名詞句の生起が容認されるという事実を同様の観点から再度検討してみる。(右方転移構文の派生についても現在の議論に関係のある部分のみを示すことにする。)右方転移構文の分析に関しては、移動分析と外的併合による分析(移動を想定しない分析)の2つを確認した。((13)および(14)を(19)、(20)として再掲する。)

(19) 右方転移構文の移動分析：

- a. *They're hard workers, those students.*
- b. [_{S1} *They're hard workers*], [**those students**]_i [_{S2} *t_i are hard workers*]

(20) 右方転移構文の外的併合分析：

- a. *The cops spoke to him about that robbery yesterday, the janitor.*
- b. [_{CP} [_{CP} *The cops spoke to him about that robbery yesterday*] [**the janitor**]]

(19b)において、文末の定名詞句 *those students* が移動する場合、定名詞句全体が移動するため、「定の緊密性」が崩れることはない。また、そのあとに続く S2 内に残された要素が削除される操作においても定名詞句が影響を受けることはない。一方、(20b)で確認されるように、外的併合分析においても、定名詞句 *the janitor* 全体が主節と外的併合されるため「定の緊密性」が崩されることはない。したがって、右方転移構文の派生過程に関するいずれの分析においても問題となる定名詞句の緊密性が保たれており、先行文脈における指示対象と適正な指示関係を成立させることができると考えられるだろう。したがって、右方転移構文には定名詞句の生起が

に示したように *man* を基体とする必要があるため、緊密性の原理の違反が生じると考えるのが妥当であろう。

容認されるという事実を正しく導くことができる。

以上のように、「定の緊密性」という概念に注目すると、存在構文と右方転移構文の文法性を正しく説明することができそうである。このような議論を踏まえ、本稿では、定名詞句が先行文脈の指示対象と適正な指示関係を構築することに関わる条件は、語用論的あるいは意味論的な観点だけでなく、形態統語論的な特性、すなわち「定の緊密性」の観点から議論することが必要であり、このような議論により各構文に含まれる定名詞句の解釈に関わる特性を正しく捉えることが可能になると指摘しておきたい⁸。

4. まとめ

本稿では、今後の詳細かつ具体的な議論に向けて、論点を整理し考察することに重点を置いたため、明確な結論を導くことはできなかったが、本稿で指摘した論点をさらに議論することで、定名詞句の解釈と形態統語的特性との関連性の解明に寄与できると考えている。具体的な議論については今後の別稿にて示すこととしたい。

⁸ 定の解釈に関わるすべての側面をとらえるためには先行文脈の指示対象と定名詞句の間の指示関係がどのように構築されるのかについて、一種の解釈規則(あるいは認可条件)を明らかにする必要があるであろう。その意味では、本稿での指摘は、定の解釈が成立するために必要な形態統語的な側面の解明に寄与する議論であると考えるべきである。なお、そのような解釈規則の候補として、生成文法において提案されている「束縛原理(binding principle)」の考え方がヒントになるのではないだろうか。以下では、原口・中村・金子(2016)の説明を引用して束縛原理の概略を記しておく。詳細については、Chomsky(1981)などを参照されたい。

(i) 束縛原理

- (A) 照応形は、その統率範疇の内部で束縛されていなければならない。
- (B) 代名詞類は、その統率範疇の内部で自由でなければならない。
- (C) 指示表現は自由でなければならない。

束縛原理は照応形、代名詞類、固有名詞等の指示表現とその指示対象(先行詞)との間の関係を規定したものである。その規定の基準となる領域は概略それぞれの要素が含まれる節内である。本稿で議論している定名詞句の指示対象(先行詞)については、その定名詞句が含まれる節外に生起するため、束縛原理が規定する外側の領域との関係を議論することになるが、束縛原理の規定内容を十分に踏まえて議論することが必要と考えられる。特に、代名詞類とその先行詞の関係を規定した束縛原理(B)との関連性を踏まえて検討することが重要ではないだろうか。

参考文献

- Anderson, S. R. (1992). *A-morphous morphology*. Cambridge University Press.
- Chomsky, N. (1981). *Lectures on government and binding*. Foris.
- Chomsky, N. (1995). *The minimalist program*. MIT Press.
- Fábregas, A., & Scalise, S. (2012). *Morphology: From data to theories*. Edinburgh University Press.
- 原口, 庄輔, 中村, 捷, & 金子, 義明. (2016). 増補版 チョムスキー理論辞典. 研究社.
- 鎌田, 浩二 (2009). 英語の右方転移構文. *Sophia linguistica: working papers in linguistics* (57), 131–153.
- Milsark, G.L. (1974). *Existential sentences in English*, Doctoral dissertation, MIT.
- 小田, 涼 (2012). 認知と指示：定冠詞の意味論. 京都大学学術出版会.
- Postal, P.M. (1969). Anaphoric Islands. *CLS* 5, 205–239.
- Whitman, J. (2000). Right dislocation in English and Japanese. In K. Takami, A. Kamio & J. Whitman, (Eds.) *Syntactic and Functional Explorations in Honor of Susumu Kuno*. Kurosio Publishers, 445–470.

グローブ座へのアクセス
—『アントニーとクレオパトラ』
(2024 年夏、シェイクスピア・グローブ座)

酒井祐輔

はじめに

ロンドンのグローブ座(Shakespeare's Globe)はウィリアム・シェイクスピア(William Shakespeare, 1564–1616)が 1599 年から、1613 年に火災で焼失するまでの間に活動の拠点とした木造劇場のあったテムズ川の南側に、当時の劇場を復元してつくられた文化施設である¹。ロンドンの中心市街からだと、テムズ川に架かる橋がそのまま駅となっているテムズ・リンク線のブラックフライアーズ駅を下車して、川岸の遊歩道を 5 分ほど歩いてテイト・モダンの前を横切るか、あるいはセント・ポール寺院のほうから伸びている歩行者専用の吊り橋、ミレニアム・ブリッジを渡るのが、一般的な接近方法ということになるだろうか。

文化施設の日本語ウェブサイトなどで「アクセス」といった場合、交通案内の意味で用いられるのが一般的だが、萩原彩子氏が指摘する通り、イギリスでは、障害のある人が施設を利用するための支援策に関する情報提供を行うページであることが多い(39)。そして本稿が論じるのも、この意味での「アクセス」である。シェイクスピア劇のアクセシビリティ公演の実態に興味を抱いた本稿の執筆者は、英文学科の海外研修(2024 年 8 月 17 日–9 月 8 日)の引率でロンドン、カムデン区に滞在していた間、グローブ座を数回訪れた(利用した交通経路は上述の通り)。実際に内部に入り観劇したのは、8 月 27 日 19 時半からの『アントニーとクレオパトラ』(*Antony*

¹ 現在の劇場から 200 メートルほど離れたところにあるオリジナルの劇場跡地にはテムズ川とグローブ座を背景にシェイクスピアの肖像を彫り込んだレリーフといくつかの案内板が設置されているものの、私有地となっていることもあり、人影はまばらだ。

and Cleopatra)』字幕付き上演(Captioned Performance)、9月3日14時から
の『まちがいの喜劇(Comedy of Errors)』リラックス・パフォーマンス
(Relaxed Performance)、9月4日14時からの『アントニーとクレオパトラ』
字幕および音声ガイドつき上演(Captioned and Audio Described Perfor-
mance)である。

グローブ座のアクセシビリティに関する取り組み状況

復元されたグローブ座は、チケット売り場や劇場、売店、カフェといっ
た施設だけでなく、レクチャー・ホールや会議室も併設しており、シェイ
クスピアの研究・教育拠点としても機能している。ガイドが劇場内部を案
内して回るグローブ・ツアー(本稿執筆者は8月28日にこれに参加した)
の待機スペースにはスクール・トラベル・アワーズの「英語英文学学習の
ために最適な場所(Best Venue for English Learning)」部門の賞状がトロ
フィーとともに3枚並べて飾られていた(2016、2019、2020年度)²。『スкуль
ル・トラベル・オーガナイザー』誌が主催するこの賞では、歴史教育、ス
ポーツ、SEND³、などの部門ごとに、毎年4～6程度の施設がノミネート
される。「英語英文学学習」部門では、グローブ座はシェイクスピアの生
地ストラトフォード・アポン・エイヴォンを拠点とするロイヤル・シェイ
クスピア・カンパニー(Royal Shakespeare Company, RSC)やハンプシャー
州のジェイン・オースティンの家(Jane Austen's House)と並んで常連候補
となっている。以下に報告するように、グローブ座がアクセシビリティ公
演に積極的に取り組む理由としては、イギリスではシェイクスピアが学校
教育教材として確固たる位置を占めており、様々な生徒や学生がシェイク
スピアの演劇に親しめるような環境を作るべきだとの要請が働くからとい

² スクール・トラベル・アワーズの公式ウェブサイトによると、2024年度の「英語英文学学習
のために最適な場所」部門はふたたびグローブ座が受賞し、11月29日に授賞式が行われたよ
うである。

³ 特別な教育的ニーズと障害(Special Educational Needs and Disabilities)の略。

う事情がある(Loftis 52)。

2024年8月の時点で、グローブ座では「視覚障がい者への音声ガイド付き公演(タッチツアー付き)」⁴、「イギリス手話通訳付き公演(British Sign Language Interpreted)」、「字幕付き公演」に加えて、「リラックス・パフォーマンス(発達障害や自閉症の人向けに鑑賞マナーを緩和し、入退場を自由とするなどした公演)の四種類の「補助付き上演(Assisted Performance)」が提供されていた。各演目につきそれぞれ2回ずつ、各種の補助付き上演が行われるよういスケジュールが組まれているようだ。

こうした公演についての情報提供がどのように行われているか、また公演日がどのように設定されているかといったことも、それぞれの劇場のアクセシビリティに対する本気度を測る指標となる(Bradbury 58)。グローブ座の場合、ウェブサイトや劇場で配布されている上映スケジュールに、音声ガイド付き公演であれば[AD]、イギリス手話通訳付き公演には[BSL]、字幕付き公演には[CAP]、リラックス・パフォーマンスには[R]のアイコンが付されている。また、公式ウェブサイト上の「ACCESS.」ページからはそれぞれの公演形態がどのような取組内容を含むのかについての説明があるほか、近日中に実施予定の補助付き上演を一覧することが可能になっており、通常のチケット予約等とは別に専用の問い合わせ用のメールアドレスと電話窓口の案内が掲載されている。スケジュールという観点からいえば、演目ごとに二回ずつ行われるアクセシビリティ上演は原則とし

⁴ 音声ガイド付き公演については踏み込んだ調査を行うことができなかったが、事前申し込みをした人に対しては入場時に受信機とヘッドセットが手渡されて、音声解説を聴くことが可能になっているようだ。また、公式ウェブサイトの情報によると、上演の前に実施するタッチ・ツアーでは参加者がガイドとともに劇場を巡り、上演で使用される舞台装置や小道具に実際に触ってみることができるという。なお、介助犬(Assistance Dog)の同伴は認められており、9月4日の音声ガイド付き公演の際には劇場内で盲導犬と思われるハーネスをつけた犬を二頭、確認した(日本語で「介助犬」とは肢体不自由のある人の手助けをするよう訓練された犬を指すが、英語の「Assistance Dog」は盲導犬や聴導犬も含め、障害のある人を支援するよう訓練された犬全般を指す)。

て一回を平日、一回を休日の公演にあてるように計画されているようだった。

リラックス・パフォーマンスは日本でも音楽系のイベントなどで近年普及が進んでいるが、9月3日の『まちがいの喜劇』の場合、本編が始まる前にステージ上にコスチュームに身を包んだ解説役が登場し、これがリラックス公演であり、途中での入退場が自由であることを説明していた。彼女が説明の途中で少し声のトーンをあげて「Make Some Noise!」と呼びかけると、観客側も歓声と拍手で応じていた。そもそも、16世紀末の木造劇場を再現したグローブ座は、観客席を完全に覆う屋根をもたず、上演中も旅客機やヘリコプターが頭上を飛び交う。このような条件下で静謐な上演環境を期待するのはナンセンスであり、ライブパフォーマンスのような観客を巻き込んだ演出がグローブ座の醍醐味となっていることを踏まえると、グローブ座とリラックス・パフォーマンスは相性が良いのかもしれない。上演中は二度ほど乳幼児のぐずる声を聞いた。一般の観客もリラックス・パフォーマンスを特別な人のためだけのものとして理解するのではなく、子育て中の親も遠慮せずに観劇できる機会として積極的に利用しているようだ。

チケット売り場横の階段を降りたところにある地下のホールに中型サイズのテントが設営されており、ここをカームダウン/クールダウンのために利用できる旨を説明した注意書きがラミネートされていた。ウェブサイトによると現在のクワイエット・スペースは「テンポラリー」なものであるという記述があるため、近いうちにより本格的な施設が整備されるかもしれない。

また、一般的な劇場とは構造が異なるため、車いす利用者がヤードから観劇する場合はステージ左側の定位置に手すり付きの金属製プラットフォームを設置する。プラットフォームを使って数十センチ分を底上げして目線を調整し、車いすに座ったままでも観劇できるようにしているわけ

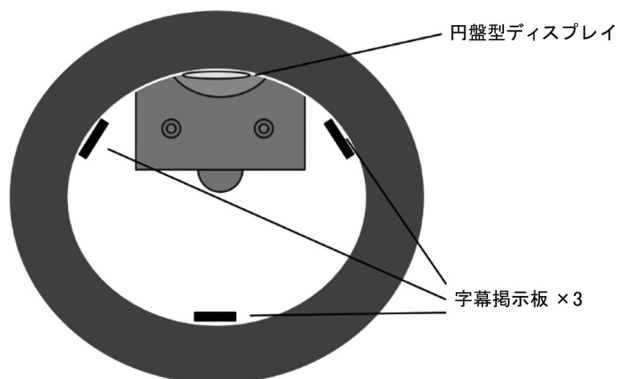
だ。本稿執筆者が観劇した三回のうち、二回はこのプラットフォームが使用されていた。また、このプラットフォームの写真は、サイズ情報とともにグローブ座公式ウェブサイト上にアップロードされており、車いす利用者が訪問を計画する際の参考となるよう配慮されている。

『アントニーとクレオパトラ』

概略的な記述はここまでとし、以降はグローブ座において 2024 年 8 月 4 日から 9 月 15 日まで、英語とイギリス手話(British Sign Language, BSL)を駆使して上演されたブランシュ・マッキンタイア(Blanche McIntyre)演出の『アントニーとクレオパトラ』に話題を絞って論じていきたい。手話上演といった場合、まずは聴者による演じられる演劇を手話通訳するという形態が思い浮かべられるかもしれない。舞台芸術の手話通訳については先述の萩原彩子氏による視察報告をご参照いただきたいが、今回取り上げるのは、聴者を含む観客を想定した公演において、主要な役どころにろう者の俳優を起用するという新しい動向である。

シェイクスピアの公演に手話が使われるのはこれが初めてではない。2012 年に行われた「世界からグローブ座へ/グローブ座から世界へ(Globe to Globe)」というシェイクスピア劇を 37 の異なる言語で上演するという企画ではロンドンを拠点とするろう者の劇団 Deafinitely Theatre による『恋の骨折り損(*Love's Labour's Lost*)』が上演された⁵。2002 年に設立された同劇団はその後 2014 年にもグローブ座で『夏の夜の夢(*A Midsummer Night's Dream*)』を公演している。今回の『アントニーとクレオパトラ』に参加したろう者の俳優たちの多くも、この劇団出身であるようだ。クレオパトラを演じたナディア・ナダラジャ(Nadia Nadarajah)は、上述の 2012 年の公演にフランス王子役で出演、2014 年の『夏の夜の夢』出演を経て、

⁵ この上演の録画はグローブ座が配信している Globe Player にサブスクリプション (£59.99/年)することで視聴可能である。



図：『アントニーとクレオパトラ』上演における字幕揭示板の配置

2018 年グローブ座で『お気に召すまま (*As You Like It*)』にシériaとして、またミシェル・テリー (Michelle Terry) が主役を演じた『ハムレット (*Hamlet*)』にギルデンスターン役で出演している。2018 年の『ハムレット』公演は DVD 化されており、男装してつけ髭をつけた姿で登場するナダラジャの姿を確認することができる。ギルデンスターンはもっぱら手話を用いて意思疎通を図るのだが、相棒であるローゼンクランツが通訳役を果たすことで、聴者の観客は字幕等がなくても会話の内容を追うことができた。クローディアスは、初対面時にギルデンスターンが手話を使うことに戸惑うのだが、二度目に会った際にはジェスチャーでなんとか意図を伝えようとしており、この演出が、やや憎めない悪役像を生み出すことに貢献していた。

マッキンタイア演出の『アントニーとクレオパトラ』はローマの人々は英語を、エジプトの人々は BSL で話すという設定となっており、したがって全体の会話の三分の一程度が手話で進行する。一部の場面を除けば手話が英語へと通訳されることはなく、BSL を解さない観客は劇場内に設けられた四つのディスプレイの字幕を読んで内容を理解する。ディスプ

レイは、ステージの二階部分に直径2メートルくらいの円盤状のディスプレイが1つ。加えてミドルギャラリーのステージ左右、およびステージ正面の3カ所にヨコ2メートル、縦0.5メートルくらいの長方形ディスプレイが設置されていた(図参照)。

ステージ上に位置することからサブタイトル(subtitle「下に出る字幕」の意)ならぬサータイトル(surtitle「上に出る字幕」と称されていた正面のディスプレイはフルカラーで、やや複雑なアニメーションを表示することも可能だ。この上演では、音楽を波紋で表現していたほか、最後のアントニーとクレオパトラの死の場面では、登場人物の死とともに文字が風に巻き上げられた砂のようにドットへと分解しながら消えていくといった効果が加えられていた。それ以外の長方形ディスプレイは鉄道駅などに設置されている電光掲示板に近い見かけだが、後述するように、一部の場面では文字を赤色で強調表示するような工夫がなされていた。また、本稿執筆者は気づかなかったことだが、何人かの評者が、エジプト人の台詞とローマ人の台詞とでは異なったフォントが用いられていることを指摘していた。

ミドルギャラリーの両脇に下げられている字幕掲示板は、アップパー・ギャラリーで観た時はあまり必要性を感じなかったが、ヤードからだとステージ上の役者に遮られてステージ後ろのディスプレイが見えないことがしばしばあり、その場合に頼りになることが分かった。しかし、役者の立ち位置によってはいずれの字幕も遮られて見づらいこともあった。振り返って反対側の掲示板を見ればいいのだが、そうすると役者の姿が視界から外れてしまう。以下に報告するように視線の問題は多くの評者も課題として言及していた。

劇評について

今回の『アントニーとクレオパトラ』の上演はその実験的な試みから注目を集め、上演がはじまって間もない8月6日には現地の民放局である

ITV News のウェブサイトにも主演の二人へのインタビューを含む 3 分弱のレポート動画がアップロードされたほか、英国劇場賞(UK Theatre Awards)の 2024 年「インクルーシビティにおける卓越」部門を受賞した。グローブ座で新しい公演があるたびに、有力紙や演劇の専門誌、地元の情報誌などから 20 件以上の劇評が出るのが通例のようだが、本稿末尾に付した付録は今回の公演に関して確認できた 22 件の劇評について筆者、媒体、五段階評価、記事の見出し、見出しに続くリード文をまとめたものである。

専門系の媒体は名称に Art、Stage、Theatre といった単語を含んでいることが多く、また記事の見出しは劇のタイトルのみを告げるシンプルなものが多い。リード文は添えられないか、あったとしても一行に満たない短いものであるか、関わった演出家の名前や上演最終日といった情報を伝える役割を担っていることが多い。それに対して、ニュース系メディアの劇評は、筆者の最終的な価値判断を示唆するような表現を含む見出しに、それを補足説明するか劇評のパンチラインを引用するかしたリード文が続くというパターンが一般的である。

確認できた劇評の大半(19/22 件)が五段階で上演を評価するシステムを採用していたが、『アントニーとクレオパトラ』の場合はそれぞれの媒体の特性によって評価にばらつきが生じる結果となった。専門系の媒体では比較的高い星四つの評価を与えている劇評も多くある一方、ニュース系の媒体ではやや辛めの評価が目につく。大手ニュース媒体では進歩的な論調で知られる *The Guardian* などはその典型といえるだろうが、見出しやリード文は好意的だが、評価はやや低めの星三つとなっている。手話を使用した演出の意図を肯定的に評価したいという気持ちと、実際に劇場に足を運んだ際の居心地の悪さ、フラストレーションとを和解させようと苦慮した評者が多いようだ。

こうした評価のばらつきはそれぞれの書き手が劇場に足を運ぶという体験に何を期待しているかの違いに、左右されていそう。実験的な演劇や

現代アートなどに慣れ親しんでいる人であれば、手話上演に対する戸惑いや抵抗感のようなものも含めて肯定的に評価する可能性が高くなるし、劇場に行くことを家族や友人、恋人とひと時を過ごすためのイベントとして捉えている人にとっては、別の基準があるはずだ。ストラトフォード・アボン・エイヴォンのロイヤル・シェイクスピア・シアターと並んで、現代のシェイクスピア受容の最先端であると同時に、一般的にもよく知られた観光地でもあるというグローブ座での上演は、この二種類の、時に矛盾するモノサシで評価されることに耐えなければならないという宿命を持っているわけだが、本稿は、この緊張関係こそがグローブ座を興味深い研究対象たらしめているという立場を取る。

これらの劇評、および本稿執筆者の体験を総合してみると、今回の公演は二つの点で課題を抱えていたといえそうである。ひとつはすでに取り上げた視線の問題であり、手話の素養のない観客は、交わされる言葉の意味を追えないまま役者の表情や仕草を追うか、役者から目を離して字幕に専念するかを選ばなければならなかった。観客の視線が一方方向に制約される額縁舞台と違って、グローブ座の場合は観客の位置によって見え方が大きく異なるため、四つの掲示板を駆使してもなお、すべての観客に対して同様の快適さを保証することは難しい。*Broadway World* の Debbie Gilpin が言うように、観客はテキストではなく役者の演技からシェイクスピアを理解したいと願って劇場に来るのだから、これは大きな欠点であると言わざるを得ない⁶。

もうひとつの課題は、二言語上演では、片方の言語しか理解できない観

⁶ ただし、*Plays International & Europe* の Simon Jenner のように、グローブ座の公演ではしばしば航空機の騒音などにより台詞が聞き取りにくいことがあるので、そうした構造上の限界を補う手段として掲示板が有効な手段となるのではないかと指摘する声もあった。今回の『アントニーとクレオパトラ』のように全ての公演が字幕付きで行われる演目はいまのところ例外的だが、英語を母語話者としない観客への間口を拡大するという意味でも、字幕付き公演の枠が拡大することには期待したい。

客にとって、劇の雰囲気을適切に把握するのが非常に難しいという点である。四幕一四場でアントニーを殺すことを拒んだエロスが自らを刃にかけ
る瞬間と、それに続いてアントニーが自刃を試みるも即死に至らずに苦し
そうな声をあげる瞬間には、観客席からかすかに笑い声があがっていたが、
本来の内容からすれば、これらは笑いを引き起こすことを企図した場面
だったとは考え難い。前半の、ナディーム・イスラム(Nadeem Islam)演じ
る使者が女王に、ローマに帰国したアントニーがシーザーの妹オクタヴィ
アと結婚したことについて、ジェスチャーを交えた BSL で報告する場面
のコミカルなやり取りは評者の間でも概ね好評だったが、なまじ前半の喜
劇的な場面の印象が強くなれば、後半の悲劇的な雰囲気にも調子を合わせる
のがその分だけ難しくなる。『ロミオとジュリエット』や『夏の夜の夢』
のような、あらすじがよく知られていて、全体の雰囲気も読み取りやすい
演目を選択すべきだったのではないかという *London Theatre* の Julia Rank
の指摘もわからなくはない。

22 件の劇評はいずれも、ろう者の観客の反応を想像したりするものも
あったにせよ、聴者によって執筆されているように思われた。*London
Theatre 1* の Terry Easham が「うっすらとだがイギリス手話を知っている」
と認めていたのと、*The Review Hub* の Louise Burns がアントニーとクレオ
パトラとのやり取りではホームサイン⁷が使用されていたことを指摘して
いたのを除いて、大半の評者たちは手話についての具体的な知識を持って
はいないようだった。

⁷ ホームサインとは、様々な事情からアメリカ手話(American Sign Language, ASL)、BSL、日本
手話といった手話を習得しなかったろうの人が、身近な人とのコミュニケーションに用いる、
ごく狭い範囲内でのみ通用する意思疎通方法の総称である。手話未満の「身振り手振り」とい
う説明の仕方がなされることもあるが、近年の言語学研究によれば、ホームサインにも言語と
しての文法構造が観測される(Coppola and Newport 19249)。本稿の文脈に戻せば、このことは
アントニーがクレオパトラに出会う以前に手話を学習していたわけではなく、クレオパトラに
出会ってから、彼女とコミュニケーションをするためにホームサインを用いるようになったの
だろうことを示唆している。

ただし *All That Dazzles* の Sophie Wilby、*London Theatre* の Julia Rank、*What's On Stage* の Lucinda Everett らは、手話が分からない故に役者たちが話している内容が分からないという体験の居心地の悪さを、聴こえないひとが英語での芝居を観ている時の感覚と置き換えて想像しようと試みていた。たとえば Rank は「その上演は我慢大会のようなものではあったが、忘れてはならないのは、イギリス手話を知らない聴衆(audience)はたった二時間半だけ聴こえる世界とろうの世界の間で過ごすことを要求されているに過ぎないが、そのような身の置き所のなさ(dislocation)を、ろうの人々は、日々、切り抜けることをどうしても要求されるということだ」と書いている。このような想像がどの程度妥当なものか、本稿執筆者は判断する術を持たないが、聴者の観客たちにこのような想像力を喚起したこと自体はひとつの成功といってよいだろう。イギリスのディスアビリティ・スタディーズには、身体的な状況としてのインペアメントとディスアビリティを区別し、後者をインペアメントのある人がそうではない人を想定して作られた社会で暮らそうとする時に生じる困難、つまり社会のしくみによって作り出されるものとして定義するという考え方がある(バーンズ 45)。このような用法にしたがえば、今回の『アントニーとクレオパトラ』公演は「聴こえる」ということをディスアビリティとして経験するように仕向けるものだったのだといえる。

文化的アイデンティティとしての手話

手話使用者の視点から書かれた論考として大変参考になったのが Jill Marie Bradbury が「聞こえない観客(a deaf spectator)」としての立場から、2019 年に北米で行われた四つの手話を取り入れたシェイクスピア公演を劇評した 2022 年の論文である(45)。この論文はもっぱらアメリカ手話(ASL)を用いた公演について論じているが、イギリス手話を用いた公演にも妥当するであろうと考えられる論点を多数、含んでいる。この論文のな

かで Bradbury は自ら公演に足を運ぶだけでなく、聴者によって書かれたそれらの上演の劇評についてもリサーチを行っているが、その中で多くの評者たちが、聴こえないことをコミュニケーション不全や孤立のメタファーとして解釈していたことに対して違和感を表明している(54)。これは手話使用者の実感とは大きく異なる。手話で意思疎通のできる仲間がいれば、聴こえないことはコミュニケーション不全や孤立を生み出すものとはならない。松井至氏のドキュメンタリー映画『私だけ聴こえる』(2022 年)を観ればわかることだが、コーダの人たちにとっては、聞こえることが、手話使用者のコミュニティからの疎外を生み出す場合さえある。

ローマ人たちの言語に英語、エジプト人たちの言語にイギリス手話を割り当てた今回の『アントニーとクレオパトラ』公演に関して、このような誤解は創造的な仕方回避されているといってよい。観客たちは自然に、手話を何らかの障害を徴づけるものとしてではなく、ひとつの言語として受け取るよう促されるし、五幕で、ローマ兵に腕を掴まれたクレオパトラが言葉にならない声をあげて抗議する(この場面のクレオパトラの台詞字幕は赤字による強調を用いて表示されていた)場面は、クレオパトラ個人に対する暴力としてのみならず、エジプトの文化的アイデンティティを蹂躪する行為として理解される。手話をひとつの国語に匹敵する言語として認知させるという点に関しては、今回の二言語上演はきわめてインパクトフルであったと評価できる⁸。

最後に、最終的にアントニーに勝利するオクタヴィアス(Bert Seymour)の冷徹さを伝えるのに手話が役立っていたことを指摘しておきたい。この公演のオクタヴィアスは徹底的にノリの悪い人物として演じられ、レピダスと対照をなしている。二幕六場で、ポンペイ(Gabin Kongolo)と政治的

⁸ 白井恭弘『ことばの力学——応用言語学の招待』などにも書かれている通り、かつては手話そのものもジェスチャーの一種としてみなされがちだった。イギリスにおいても政府がイギリス手話を言語として公式に認めたのは比較的最近の 2003 年のことだ。

な合意に達したアントニー、オクタヴィアス、レピダスは、黒人俳優のコンゴロが演じるボンペイと順番にフィスト・バンブを交わすのだが、四人のなかで一番年配のレピドウス(Peter Lindi)だけはボンペイと複雑なダップ⁹を交わそうとして逆にボンペイを困惑させる。続く宴会でも、レピドウスはコールに応じて何杯も盃を空けていく、いわば過剰にノリのよい老人である。それに対して、オクタヴィアスはコールに応じず、盛り上がりかけた場を白けさせてしまう。レピドウスの人のよさは、彼が早々に政治闘争から脱落するだろうことを予感させる一方、オクタヴィアスのノリの悪さは彼の政治指導者としての慎重さを印象づけるものになっている。

五幕二場においてクレオパトラと会見する際にもオクタヴィアスはプロキュレーアスに通訳をさせて手話はもちろん、簡単なジェスチャーさえ使おうとしない。まるで手話を使うことによって、アントニーを墮落させたエジプト的な価値観が自分にも感染してしまうと恐れているかのように。先に言及した2018年の『ハムレット』公演では、クローディアスさえギルデンスターンにジェスチャーで語りかけようとしていたのだから、オクタヴィアスの冷淡さは際立っている。この点は手話の導入が、劇中人物の解釈に新たな深みを与えている例として評価できるのではないだろうか。

おわりに

グローブ座やRSCの公演は近年、DVDや動画配信によって、日本にしながらにしてその動向をある程度までは把握できるようになっている。そうした動画を視聴していて気づかずにはいられなかったのは、2010年代後半頃から、非白人の俳優を積極的に起用したり、あえて登場人物の性別を逆転させたりして、シェイクスピアという文化遺産を、他民族国家イギ

⁹ 二〇世紀後半にアフリカ系アメリカ人の間に生まれた握手やフィスト・バンブ、ハグなどの動作を複雑に組み合わせたジェスチャー。この公演はナディーム・イスラムがインド映画風のダンスで喜びを表現するなど、現代文化へのアナクロニスティックな言及を複数含んでいる。

リスの現在を反映させた形で上演しようという姿勢が明確に打ち出されるようになってきたことだ。本稿で取り上げた「アクセス」に関する取り組みも、こうしたシェイクスピアを通じた社会的包摂というプロジェクトの一環といえる。

実験的な試みは、時にアイデンティティ・ポリティクスに絡んだ敵対的な論争に発展することもあるものの、グローブ座や RSC の演出方針としてはすっかり定着した感がある。こうした演出方針に対しては古典作品に現代の価値観を押し付けているといった批判が寄せられることも考えられるが、作品に新たな理解をもたらしたり、現代社会についての理解を深めたりすることにもつながる場合があることは確かだろう。20 世紀前半の小説を本領とする本稿執筆者の手話に関する知識とシェイクスピア理解はごく限られたものであり、有益な情報提供ができたかは心許ないものの、本稿がさらなる充実した研究の呼び水となることがあれば幸甚である。

Bibliography

Abbott, Chris. "Review: *Antony & Cleopatra*, Shakespeare's Globe." *West End Best Friend*, 15 August 2024.

"Access." *Shakespeare's Globe*. <https://www.shakespearesglobe.com/visit/access/>. Accessed 28 December 2024.

Allfree, Claire. "*Antony and Cleopatra*: An Admirable Concept Using BSL Falls Flat." *The Telegraph*, 15 August 2024.

Birchenough, Tim. "*Antony and Cleopatra*, Shakespeare's Globe Review - Egypt in Sign Language, Rome in Pale Force." *The Arts Desk*, 19 August 2024.

Bradbury, Jill Marie. "Audiences, American Sign Language, and Deafness in Shakespeare Performance." *Shakespeare Bulletin*, vol. 40, 2022, pp. 45–67.

Burns, Louise. "*Antony & Cleopatra*: Shakespeare's Globe, London." *The Reviews Hub*, 16 August 2024.

- Coppola, Marie and Elissa L Newport. "Grammatical Subjects in Home Sign: Abstract Linguistic Structure in Adult Primary Gesture Systems without Linguistic Input." *Proceedings of the National Academy of Sciences*, vol. 102, no. 52, 2005, pp. 19249–19253.
- Curtis, Nick. "Antony & Cleopatra at Shakespeare's Globe Review: This Bold Sign Language Adaptation Is Thrillingly Radical." *The Standard*, 15 August 2024.
- Davda, Rishi. "Shakespeare's Globe Welcomes Bilingual British Sign Language Production." *ITV News*. 6 August <https://www.itv.com/news/2024-08-06/shakespeares-globe-welcomes-bilingual-british-sign-language-production>. Accessed 28 December 2024.
- Davis, Clive. "Antony and Cleopatra Review: Woefully Unfocused." *The Times*, 15 August 2024.
- Easham, Terry. "Antony & Cleopatra: Shakespeare's Globe | Review." *London Theatre 1*, 5 September 2024.
- Everett, Lucinda. "Antony and Cleopatra at Shakespeare's Globe: Review." *What'sOnStage*, 15 August 2024.
- Fagnoli, Dave. "Antony & Cleopatra Review." *The Stage*, 15 August 2024.
- Ferrauti, Christian. "Antony and Cleopatra at Shakespeare's Globe." *The Upcoming*, 18 August 2024.
- Gilpin, Debbie. "Review: Antony & Cleopatra, Shakespeare's Globe." *Broadway World*, 14 August 2024.
- Hemming, Sarah. "Antony and Cleopatra, Shakespeare's Globe Review: British Sign Language Adds New Dimension to Romantic Tragedy." *Financial Times*, 20 August 2024.
- Holland, Michael. "Review: Anthony and Cleopatra: Globe." *South London*, 16 August 2024.

- Jenner, Simon. “*Antony and Cleopatra* at the Globe Theatre.” *Plays International & Europe*, 15 August 2024.
- King, Stuart. “Review: *Antony and Cleopatra* at Globe Theatre.” *London Box Office*, 15 August 2024.
- Loftis, Sonya Freeman. *Shakespeare & Disability Studies*. Oxford UP, 2021.
- Lukowski, Andrzej. “*Antony and Cleopatra*.” *Time Out*, 15 August 2024.
- Morrow, Madeleine. “*Anthony and Cleopatra*: Shakespeare’s Globe Theatre.” *London Unattached*, 15 Aug 2024.
- Mountford, Fiona. “*Antony and Cleopatra*, Globe Review: This Sign Language Show Was Better on Paper.” *inews*, 15 August 2024.
- Pearn, Alexander. “Review: *Antony and Cleopatra*.” *A Young(ish) Perspective*, 17 August 2024.
- Rank, Julia. “*Antony and Cleopatra* Review: the Use of Sign Language Adds a Powerful Contemporary Message to Shakespeare’s Play.” *London Theatre*, 15 August 2024.
- “What’s on until October 2024.” edited by Shakespeare’s Globe, 2024.
- Wilby, Sophie. “Review: *Antony and Cleopatra* (Shakespeare’s Globe Theatre).” *All That Dazzles* 15 August 2024.
- “Winners Announced at the UK Theatre Awards 2024.” *UK Theatre*. <https://uktheatre.org/winners-announced-uk-theatre-awards-2024/>. Accessed 28 December 2024.
- Wyver, Kate. “*Antony and Cleopatra* Review: Bilingual BSL Staging Adds Intimacy and Clarity.” *The Guardian*, 15 August 2024.
- “Your 2024 School Travel Awards Winners and Finalists.” *School Travel Awards*. <https://www.schooltravelorganiser.com/school-travel-awards/your-2024-school-travel-awards-winners-and-finalists/84280.article>. Accessed 28 December 2024.

白井恭弘『ことばの力学——応用言語学の招待』岩波書店、2013年。

萩原彩子「イギリスにおけるアクセシビリティ公演ならびに舞台芸術手話
通訳に関する視察報告」『筑波技術大学テクノレポート』24巻、2号、
2017年、39-44頁。

バーンズ、コリン、ジェフ・マーサー、トム・シェイクスピア『ディスア
ビリティ・スタディーズ：イギリス障害学概論』杉野昭博、松波めぐみ、
山下幸子 訳、明石書店、2004年。

松井至『私だけ聴こえる』太秦、2022年。

Appendix: Reviews of *Antony and Cleopatra*
(4 August to 15 September 2024 at Shakespeare's Globe)

No.	筆者 / 媒体 / 評価	見出し	リード文
1	Abbott, Chris / West End Best Friend / 4	Review: ANTONY & CLEOPATRA, Shakespeare's Globe	None
2	Allfree, Claire / The Telegraph / 2	Antony and Cleopatra: An admirable concept using BSL falls flat	The casting of both deaf and hearing actors and use of BSL isn't the problem in this production – it's the lack of other ideas
3	Birchenough, Tim / The Arts Desk / 4	Antony and Cleopatra, Shakespeare's Globe review – Egypt in sign language, Rome in pale force	The Globe stretches the theatrical experience with this bilingual BSL production
4	Burns, Louise / The Reviews Hub/ 3.6	Antony & Cleopatra – Shakespeare's Globe, London	None
5	Curtis, Nick / The Standard / 3	Antony & Cleopatra at Shakespeare's Globe review: this bold sign language adaptation is thrillingly radical	Nadia Nadrajah is imperious as Cleopatra
6	Davis, Clive / The Times / 1	Antony and Cleopatra review — woefully unfocused	It's encouraging to see deaf actors being given their moment at the Globe, but Blanche McIntyre's bilingual production plays out like a leering sitcom
7	Easham, Terry / London Theatre 1 / 4	Antony & Cleopatra – Shakespeare's Globe Review	To the Globe once more for a spot of Shakespeare as Lynne and I take our seats for a very unusual and innovative production of Antony & Cleopatra.
8	Everett, Lucinda / What'sOnStage / 4	Antony and Cleopatra at Shakespeare's Globe – review	Blanche McIntyre and Charlotte Arrowsmith's production runs until 15 September

グローブ座へのアクセス—『アントニーとクレオパトラ』
(2024 年夏、シェイクスピア・グローブ座)

No.	筆者 / 媒体 / 評価	見出し	リード文
9	Fargnoli, Dave / The Stage / 4	Antony & Cleopatra review	Smartly executed
10	Ferrauti, Christian / The Upcoming / 3	Antony and Cleopatra at Shakespeare's Globe	None
11	Gilpin, Debbie / Broadway World / 3	Review: ANTONY & CLEOPATRA, Shakespeare's Globe	Blanche McIntyre directs this bilingual production
12	Hemming, Sarah / Financial Times / 3	Antony and Cleopatra, Shakespeare's Globe review — British Sign Language adds new dimension to romantic tragedy	The Romans use spoken English while the Egyptians communicate in BSL, with mixed dramatic results
13	Holland, Michael / South London / None	Review: Anthony and Cleopatra – Globe	Spoken, Written and Signed – A Shakespeare For Everyone
14	Jenner, Simon / Plays International & Europe / None	Antony and Cleopatra at the Globe Theatre	None
15	King, Stuart / London Box Office / 2	Review: ANTONY AND CLEOPATRA at Globe Theatre	None
16	Lukowski, Andrzej / Time Out / 3	Antony and Cleopatra	Deaf actor Nadia Nadarajah is superb as a passionate Cleopatra, although this bilingual production's shifts between English and BSL feel cumbersome
17	Morrow, Madeleine / London Unattached / None	Anthony and Cleopatra – Shakespeare's Globe Theatre	Bilingual production at The Globe Theatre
18	Mountford, Fiona / Inews / 2	Antony and Cleopatra, Globe review: This sign language show was better on paper	An accessible Shakespeare production was well-intentioned but disappointing
19	Pearn, Alexander / The Young (ish) Perspective / 4	REVIEW: Antony and Cleopatra	A rich and inclusive reimagining
20	Rank, Julia / London Theatre / 3	Antony and Cleopatra' review – the use of sign language adds a powerful contemporary message to Shakespeare's play	Read our review of history play Antony and Cleopatra, now in performances at Shakespeare's Globe to 15 September.
21	Wilby, Sophie / All That Dazzles / 3	Review: Antony and Cleopatra (Shakespeare's Globe Theatre)	None
22	Wyver, Kate / The Guardian / 3	Antony and Cleopatra review--bilingual BSL staging adds intimacy and clarity	The Egyptian queen's court communicates in sign language in Blanche McIntyre's production, giving physical shape and frequently extra depth to the text

映画『私だけ聴こえる』上映会 開催報告書



私だけ聴こえる

監督 | 松井 正
出演 | ASHLEY RYAN / NYLA ROBERTS / JESSICA WEIS / MJ / 鄭 旗 英 彰
製作 | チムジン / リトルネロフィルムズ
プロデューサー | 平野 まゆ 音楽 | チニス・コーツ 共同監督・撮影 | HEATH COZENS

編集 | HERBERT HUNGER 日本語字幕 | 安宅 典子
字幕制作 | パッソ・パッソ サウンドミキサー | 高梨智史
カラーグレーディング | 斎藤直徳 デザイン | サムワズガーデン
協力 | TOKYODOCS / 文化庁 配給・宣伝 | 太秦 【2022】日本 | カラー | DCP | 5.1ch | 76分 | ©Temjin



















耳の聴こえない親を持つ、耳の聴こえる子どもたち
音のない世界と聴こえる世界のあいだで居場所を探すドキュメンタリー

映画『私だけ聴こえる』上映会開催報告 はしがき

一般教育部 間瀬幸江

2024年10月12日（土）14時～16時、宮城学院女子大学講義館 C202 教室にて、ドキュメンタリー映画『私だけ聴こえる』の上映会&ポストトーク企画を開催した。主にアメリカのコーダたち（Children of Deaf Adults = 聞こえない、または聞こえにくい親を持つ聞こえる子ども）、コーダキャンプ（コーダだけが集まり数日間を過ごす企画）のアシュリーさん、キャンプの参加者である10代のナイラさん、MJさん、ジュシカさんたちとその家族のリアルな声が聞こえ続ける80分の作品である。トークに登壇くださったのは監督の松井至氏、聞き手を間瀬がつとめた。

主催は、本学人文社会科学研究所共同研究課題「手話習得者・学習者間のつながりに関する実践的基礎研究」研究チーム（研究代表者：間瀬幸江 研究協力者：酒井祐輔、山口晋平、吉村典子）で、英文学科の共催を得た。また、大学学園祭（10月12—13日開催）の参加企画でもあった。学生、教職員、一般客など70人ほどの方々に来場いただいた。大学での多くの講義や講演会では、後部座席の着席者が多く前方はあいてしまいがちだが、この日の70余人は、250人定員の階段教室のあちこちに散らばるようにして着席していた。お気に入りの席を自由に選ぶ映画館さながらの景色に、個人的かつ自発的な興味から会場に足を運んでくださった人々と時間を共有できたことを実感した。

宮城学院女子大学の中で最も長い歴史を持つ学科のひとつである英文学科は、2026年を節目に、英語文化コミュニケーション学科へと変わる予定である（2025年1月現在、設置構想中）。「コミュニケーション学」という極めて広範で複合的な領域を学科名の一部に用いるには、それを標榜できる軸が必要である。本企画は、「英語」と「文学」の学科から、「英語

の学び」と「文化」「コミュニケーション」の学びが相互に連携する学科へ移行するための、言語化のプロセスのなかで着想された。

「コミュニケーション」が「社会生活を営む人間が互いに意思や感情、思考を伝達し合うこと」（デジタル大辞林より）であるなら、それをよりよく行うことのできる学びが、この学科にはなくてはならない。ふりかえるに、本企画の実現は、新学科がとらえようとする「コミュニケーション」に関わる意見表明の機会でもあった。松井監督は「映画を見た人がだれであっても、どのような属性であっても、この映画があなたの〈他者と生きる〉心を形作る経験となることを願います」（上演パンフレットより）と述べているが、これに倣い新学科も、このコメントの「映画」に「学科」を代入できるような学びの軸を持ち歩みたい。

松井至監督のポストトークの全文の文字起こしと、共同研究チームの研究分担者のうち2名による企画のふりかえり、そして最後に、筆者による企画実施報告を掲載した。一読して、企画の全貌を想像いただける報告書となったと思う。松井監督、寄稿者（酒井祐輔、山口晋平の両氏）、来場くださった方々、研究科助手の丑田由美さん、この企画に心を寄せてくださった方々に感謝申し上げる。

ポストトーク

間瀬（司会）：松井至監督をお迎えいたします。拍手でお迎えください。宮城学院女子大学の文化祭で、しかも英文学科として監督をお呼びできたこと、皆さんでこの映画を見ることができたことがとても嬉しいです。上映前のセッティングをしていただいて、そのあと、本学教室でお座りになってこの映画を見せていただきましたが、ご自身の映画をこうしてご覧になる感じというのは、どんなお心持か、そのあたりよかったら教えてくださいますか。

松井：久々に自分も座って映画を見ましたが、その時の自分がコーダたちと過ごした時間というのを、やっぱりかけがえのないものだったんだなと感じますし、いつも驚くのはコーダの主人公たちはまだ10代の子たちですが、よくカメラの前で成長してくれたなと。自分自身をどんどん見せていつてくれたなあ、ということを思いました。撮影の途中から、撮る撮られる関係から解放されていきました。彼女たちがカメラの前を舞台にして自分を表現する場にしていって。新しいアイデアを思いついて「ここに撮影しに来ない？」と言われるようになりました。そういう彼女たちの自己表現になったということが、ひとつひとつのシーンを非常に力強くしているなと思いました。僕自身が思うことは、ああカメラが下手だなとかそういうことなんですけど。コーダの子たちのしたことはいつ見ても感心します。

間瀬：それで、作品ができるまでのお話を、まずはお聞きしようと思うのですが、着想は、2015年にさかのぼることですね。この着想から、2019年にテレビ版ができて、そして22年に至るまでの沿革というか、どういう道を辿ったか、教えていただけますか。

松井：2011年3月11日の1週間ぐらい前に、映像の仕事を始めたんですね。すぐに地震があって、東日本大震災の番組がたくさん作られる時期になりました。3、4年経った2015年に、ようやく自分はディレクターになって、その時にNHK ワールドの番組で海外の視聴者に向けて東日本大震災の復興について描く30分の枠があり、一本企画を書くことになりました。企画を書かなきゃと思いながらシャワーを浴びていてふと、もし耳が聴こえなかったらどのようにしてその津波の情報を得ていたのか、あの地震の後ですこし時間が空いて津波が来たわけなんですけど、もしかしたらサイレンの音、あれが聴こえなかったんじゃないのかというふうに思ったんですね。聴こえる人たちがみんな逃げてしまったからっぽの町に聴こえない人だけが残っている、後ろからは巨大な津波が迫って来ている。そういう1枚の絵が思い浮かんで、ああ、これはもしかしたらこういうことがあったのかもしれないと思って調べ始めて。そしたら沿岸地域では多くのろう者の方が亡くなっていたんですね。

それで仙台の耳サポという、聴覚障害者の支援センターに行きまして、いろんなろう者の方々に会わせていただきました。その時に「津波からどのように逃げたんですか？」という話をしたら、「自分の聴こえる息子や娘が駆けつけてくれた。それで命が助かった。」という人が何人もいらっしゃったんですね。ご自分にも、幼稚園の子どもがいる。それにもかかわらず身体が勝手に動くようにしてろうのご両親の方に向かったんだ、ということでした。ここにはものすごく濃い親子関係があると感じました。

それで、その番組のロケの途中でのことなんですが、手話通訳士でアメリカ手話と日本手話の両方ができるアシュリーさんという方に番組のリポーターを頼んでいました。彼女がロケの途中で具合が悪くなってしまって、うつむいて落ち込んでいたので「どうしましたか、大丈夫ですか」と声をかけたところ、これまで私たちが会ってきた、聞こえる子どもたちは「コーダ」というのだ、自分自身もコーダなんだ、という話をしてくれた

んですね。ロケが終わってその話をさらに詳しく聞きました。カフェの前で彼女が座っていたのですけれども、「私の身体はあなたとおなじで。でも心のなかがデフ（編者註：英語で聴こえない人、聴こえにくい人の意）なんです。」と言われたのです。それを聴いたとき、非常に不思議な感じがしました。目が見えない人は見てわかるし、耳が聴こえない人もわかるんですけど、そうじゃなくって、心のなかが違うというのはどういうことなんだ、と。こんなことを聴いたのは初めてでした。それで一気にその世界に引き込まれました。心のなかが違うということをどうやって映像で撮ればいいのかまったくわからなかったのですが、その「写らないだろう」という不可能性が魅力だったのかもしれません。知られざるコミュニティで想像できない世界認識をしている人たちがいるという予感もありました。彼女が「あなたにコーダの世界の映画を撮ってほしい」と言ってくれて。それで、「アメリカでコーダという概念が始まった」という説明を聞いて、彼女はアメリカでは少し名の知れたコーダだったので、映画のためにコーダの世界との架け橋の役をしてくれるというので、そこから企画が始まりました。

間瀬：アシュリーさんは映画の中でもとても重要な位置づけで、何度も出てこられましたが、彼女はどんな言語が使えるというか、話せるんですか。米語、アメリカ語の、ですね、その手話と、あと、日本の手話ができる？

松井：もともとアメリカ手話、ASL を話していて、そして英語ですね。アシュリーさんのお父さんという人が出てきましたが、あの方が空手をやっていて、日本人に習っていた。それで「日本人は俺を差別しなかった、空手をしっかり教えてくれた、日本はいいところだぞ。」という話を、彼女は小さい頃から聞いていて、それで彼女は日本に来るのが好きでよく滞在していました。その時に、日本手話を覚えた、と。だからその三つの言

語を使えました。

間瀬：日本の手話と、米語の手話と、英語。なるほど。アシュリーさんとの出会いがあって、その先にコーダキャンプがあった、ということなんですか。

松井：そうですね、まず、コーダを描くというときに、何歳くらいのコーダを描こうかというかという話になって。アイデンティティを形成する10代後半くらいの年齢のコーダを描くのが非常に重要だろう、という話になりました。それからアシュリーさんがSNSでアンケートを配って、10代のコーダにそれに答えてもらって。そこから選んで連絡して、ナイラと出会ったという感じです。コーダの多くは、コーダキャンプに来ますがそこにはデフも入れない、コーダだけで二週間過ごすという決まりがありますので、アシュリーがいたから聴者のロケ隊がキャンプに入らせてもらったという感じです。

間瀬：私はこの映画が好きで、大きなスクリーン、小さなスクリーン両方だと10数回見てるんですが、パンフレットに書かれたこともかなり読んでいます。そこで、ナイラさんを怒らせてしまって、制作をやめなきゃいけないかもしれなかった、というのを読みました。そのあたりのお話お聞きしてもいいでしょうか。

松井：まずはじめにアシュリーとナイラと3人でスカイプをしまして。その時にナイラの印象が強烈で、感情がすべて顔に現れて言語を話さなくても伝わってくるのを感じて、彼女を撮りたいと思いました。ぜひ会いたいということで三泊四日だったかな、ナイラいるインディアナに行って撮影をしたんですよね。そのロケで撮れたのが、映画でも使っているベッドルー

ムでのインタビューでした。たしか1時間半くらい撮ったんですけど、あれが、会って二日目くらいに映画で使っているすべてののと言っても過言ではないくらいのことばが、声が撮れたんですね。ああ、すごいことを聴いてしまったなあ、というふうに僕は思いました。あの後、何度もインタビューしたんですけども、あれ以上のものは出てこなかった。彼女があの時、15歳かな、14歳かもしれません。それまで誰にも言わないで心の中で育ててきたことばが、僕みたいなアウトサイダーが現れたときに一気に溢れ出てきたという感じでした。

ドキュメンタリーをやっているとこういうことがしばしば起こるんですけども、普段人は日常の中で自分のことばを抑制しているところがあるんですよ。親には親に見せる顔やことばがあって、子どもには子どもに見せる顔やことばがあって、友だちには友だちに見せる顔やことばがある。その中でそれぞれ、言うことと言わないことを分けている。そういう意味で、僕のようなここにも属さない、あまり利害関係のないアウトサイダーがやって来ることによって、一気に自分のことを話す機会ができる時があって、それがナイラのあの一時間のなかに満ちていた。それで「ここまでのことを聴いてしまったからには、それを運ばないといけないんじゃないか」と思ったんですよ。これは、世界中の人にコードの存在を届けないといけないっていう、ある自分の役割みたいなものがそこで生まれた。聴いてしまったからにはやらなきゃなあという感じで。

それでTokyoDocsというドキュメンタリーの国際企画会議というのがありまして、そこで企画を発表しました。いろんなテレビのプロデューサーたちが来て、話し合ってお金を出してもらったりとかするんですけど、そこで最優秀賞を頂いて、それからカナダのトロントの国際会議にも出て、世界の映像業界の人たちが「これは知られざる世界だ」ということで、非常に注目してくれました。その会議で2、3分の短い映像を見せるんですけど、ナイラが「その映像を見たい、自分がどんなふうに映っているか

見たい」というふうに出てきて。僕もそれなりうまく描けたなあっていうのがあったんで、ナイラに見せたんですよ。そしたら、最初は「美しい」って言ってたんですけど、だんだん「自分が泣いているカットを使わないようにしてほしい」とか、「なんか悲しそうに見える」とか、だんだんだんだん意見が分かれてきて、最後には「松井はコードじゃないんだから、コードのことはわからない」と。「まずそれをもっと認識してくれ」ということで、ほとんどそこで縁が切れた感じになって。彼女も「もう映画には出たくない」と。

なので企画としては評価されてうまくいったんですけど、もう撮影ができる状態じゃなかった。この状態が1年近く続いて。自分としても、自分の職能というのが、人の物語をストーリーテリングして違う人に伝える、そういう職能だと思ってドキュメンタリー制作をしてきたので非常にショックでした。「なんでいけないんだろう」ということをずっと考えていて、自分もなんだか映像も観れなくなってしまっ

た。ナイラに言われたことを反芻していると、非常に重要なことがそこにはあって。ナイラは「私の物語は私のもの」って言ったんですよ。ああ、それは本当にそうだな、と。自分はその他者の物語、他者が生きてきたことですよ、それを、代弁しようとしていたんじゃないか、映像を用いて。でも誰も「あなたの人生はこうですよ」なんて自分の生きてきた物語を代弁されたくはないんですよ。それがどんな事情であれ。正しかろうが美しく描かれようが、代弁はされたくない。ただ、自分で自分自身を表現することはしたいんですよ。僕としてはドキュメンタリーを通して他者を代弁してた、ということに気付きました、これまで。その方法は間違っていたし、自分の認識が間違っていたんだろうなと。1年間、そういうことを考えてましたね。

間瀬：そういった、大きな、停止の期間を経て、また、再会して、分かり

合うってというか、理解した、という段階で、松井さんがナイラさんにおっしゃったことばで——これは、私はびっくりしたんですけど——「僕には、コーダって何か、わかりませんでした」っておっしゃったんですよね。それが次のステップへの最終的な、きっかけになっていたんですよね？

松井：そうですね、ナイラとはそんな風に1年くらい、連絡を取っていない状態が続いたんですけど、これまでに撮ったものをまとめてリンクを送って「いつか映像を見てください」という状態で止めてあったんですけど、そうしたらナイラのところにコーダの友だちが集まった時に見せたらけっこう受けがよかったらしくて、「もうちょっと続けてもいい」という感じで連絡が来たんですよね。その時に「とにかくじゃあ、もう一回行こう」ということになって、インディアナポリスの空港でタクシーに乗って、郊外の彼女の家まで行くんですけど、その間ずっとなにをしゃべろうか考えていて。これまでの自分と、これから撮影する自分と、考え方がどう変わったのかっていうことを、ちゃんと示さなくちゃいけないということを思っていたんです。それって今思うと、ドキュメンタリーが一方的に人を見るのは暴力になってしまうだろうというところを、どうやって越えたらいいんだっていうことと同じだったんですけど。タクシーのなかでいろいろ考えたんだけど、ああしよう、こうしようっていう小手先の考え方じゃやっぱりだめだなっていう。

考えがまとまらないまま着いたら、ナイラがまだちょっと怒っててというか、仏頂面をしていて、ああ、これは、まずいと。もう正直に話すしかないな、と。で、「自分は1年間考えたんですけども、コーダってなんなのか、わかりませんでした」と言いました。で「ぼくにはわからないのでコーダであるあなたがディレクターになってくれませんか」って頼んだんですよね。

撮影のシステムとして、ディレクターが力を持ちすぎている構図が勝手

に生まれていて「次に何をやっていいですか」みたいにぼくに聞いてきてしまったりするんですよね。そういうつき合い方って人としておかしいなって思っていて、これをじゃあ逆にしてみようと。「ナイラは何がしたいのか」「どういう場所に行ったら何が描けると思いますか？」って一緒に想像してもらったんですよね。そうしたらスケジュールを出してきて「この日はこれがある」って書き始めて「そこに来たら何が撮れると思う？」って聞いてきて、僕が「それだとこれとこれが撮れるからこういうシーンになると思うよ」って漫画を思い浮かべるようにして形にしていって、そのキャッチボールを4、5時間やるんですよね、毎回。それから撮影をするんですけど、その方法を全員にやりました。MJもそうだし、ジェシカもそうだし、アシュリーもそうです。だから全員が自分でシーンを作ってるんですね。今、皆さんが見たものは、全部彼女たちが考えたというか、案内してくれてそのなかで自分が撮ったもの、ということです。

間瀬：大学で授業をしている者として、学生たち一人ひとりの声を聴こうとか、彼女たちが自分で考え、自分で実行することを邪魔しないためにはどうしたらいいんだろう、ということを、ある種絶望的になって考えていたりするんですけども、そういう生業の人間として、今、本当に心に響く、意味のある、経験談をお聞きすることができたなあと思います。

もっともっとお聴きしたいこともあるのですが、時間の限りがありますのと、質問をお寄せいただいていますなかで、いくつかだけ、読ませていただいて、松井さんに、お答えいただけたらと思うのですが。

まずこちら、映画の最初のほうで、東北の被災者の方のお話がありましたね。「奥様は、聴者の世界で生きてこられた方だと思います。少し暗く、うつむく様子が気になったのですが、奥様は、旦那様の姿を見られて何か思っておられたのでしょうか」という質問です。

松井：ああ、あの息子さんの奥さんでしょうか。そうですね、聴者の方でした。たぶんですが息子さんはフラットな考えの持ち主で、両親の近くに住んでいてそれほどネガティブにとらえるというか、暗く物事をとらえる方ではないのかなと思いますね。ただ、普段あまり、こうしたことをしゃべっていないんじゃないかと思いました。被災した時の心境や両親と自分との関係について。奥さんは自分のパートナーの方の心のうちを聴いたの、それで真剣な面持ちだったのかもしれませんが。

間瀬：はい、ありがとうございます。もう一つ。「誰かと、何かの比較が、生きることを難儀にする。私は私でよい、でも、人は、同じであることに安心し、逆にそれが差別を生む。なぜだろう」とのことです。なんででしょうね、人と比較することで、生きることが難しくなる。そこから生じる差別の感覚は、いったいどうしてなんだろう、ということかなと思いますが。

松井：そうですね、僕はつい最近モスクワに呼ばれて。この映画をもって上映に行ったのです。上映後にステージであいさつをして出て行こうとしたら、50代の男の人に呼び止められ睨みつけられて「あなたはまったくコードのことをわかっていない」というふうに言われました。僕はその場で立ち去ったんですけど。その・・・彼は、コードだろうと思うんですね。つまり彼は「この映画に出て来るひとたちより自分のほうが辛い思いをした」とか「コードというのはもっとつらいことなんだよ」ということがたぶん言いたかったのかなあと思うんです。そうじゃないとあんなに怒りませんから。

こういうことを僕はコードに教わったのかなあ、という気がして。つまりコードに限らないんですけど誰も自分に生まれたかったわけではないし、それを選べるわけでもないんですよ。もともと、どこに生まれおちるかというのは非常に不平等なものなんですけど、誰にも分からない

苦しみというのはどうしても生まれるんじゃないかなと思っていて。それには、基本的には名前がつけられない。そういうことをコードに教わった。それは誰しもが持っているものなんだろうなあ、と思っています。

それと、あとはこの社会がろうの側からみると、非常に文字情報にかたよっている。そして音声情報にかたよっている。言語至上主義というか、そのなかで文字や音声言語をしゃべることがうまい人が社会的地位を得ていく。大学の先生になったり、政治家になったりする。そういうこと自体が言語の持つ「分別」の能力に基づいているということだと思うんですね。だから、たとえば発達障害という名前が付いて、さらに新しい症状が何か出ると、それにまた名前を付ける。そういうことの繰り返しで、先ほどおっしゃられていた「なんで違いが生まれてしまうのか」という問いにつながっていくのかなと思っています。言語ということで僕がデフの世界から学んだことがあるとすると「目で見ることば」だったと思うんですね。手話というのは、お互いの目を見て、そして表情までがすべてことばになる、その身体から発しているものを受けとっているわけで、そういうものというのはすごく温かいものなのかな、と基本的に思っています。ろうの世界に触れることで、僕ら聴者がことばだけで人をジャッジメントしてしまったりすることの戒めがそこにあるというか、逆側から世界を見せてくれるのかなと僕は思っています。

最後のセリフで「私は私でいい」というふうに描いたのは、そのところなんです。あの日は、もう撮るものがなくなって「何を撮りたい？」ってナイラに聴いたら「雪合戦」って言って。「じゃあ、みんなで雪合戦やろうか」という話になったんですけど、それまでいろいろ喧嘩をすることがあったり、わだかまりがあったりしたんですけど、僕は日本人ですし彼らはアメリカ人ですし、ことばも通じないし。だけどあの時は、なにが長い旅が終わったような感じでデフであるとかコードであるとかヒアリング（編者註：Hearing＝耳の聞こえる人、聴者）であるとか、考えなかつ

たんですよ。ただただ仲のいい家族の幸せな瞬間を撮っているという感じがしました。なので、それを撮れた時に「ああ、ここにはもう来ないだな」っていうふうに思ったんですよ。「もう今日で終わりだな」と思って、それでロケが終わったんです。本当に。その日のことがラストシーンになったんですね。ラストシーンを意図して設計できるような制作ではなかったんですけど、結局そうなったんです。

だからむしろ映像をつくるというのは、物事を分けるという言語的な機能ではなくて、逆にその言語でがんじがらめになったものをほどいていったりとか、分かれていたものは実は同じだったと気付いたりとか、そういうふうに物事を結び付けたり、縫い付けたり、ほどいていったりする、そういうことの中にあるのかなという気がします。

間瀬：ありがとうございます。時間が過ぎてしまっているんですが、同じ質問をくださった方が何人かおられるのもう一つだけ。それは、コーダキャンプにあたるようなものは、日本にはどんなふうに存在しているか、ご存じのことを教えてください、ということなんですが。

松井：はい、日本のコーダは「Jコーダの会」が90年代からありまして参加ができます。ただ、実はアメリカの人たちのほうが集団主義的で、集まるのが好きで同じTシャツを着たり同じ帽子をかぶったりするのが好きだったりして、日本人のほうがそれをやらないですね。あと、アメリカの場合、ろう者の運動があったのですよね。社会の中で非常に強い立場、というか、強い立場までは行かないけれども、非常に強く、自分たちの権利を作ってきた歴史がある。その分コーダたちが、自分たちの世界をつくることにも協力的だったりします。日本だとコーダの人たちも、特に自分がコーダであるっていうことを公言する必要もないんじゃないか、っていう意見はけっこう聴く気がしますね。

あとは、そうですね。「コーダ同士で会ったほうがいいんじゃないか」みたいな考えも、アメリカから帰ってきてあったんですけど、日本でコーダの人たちとたくさん話してみると、「別にコーダの友達がほしいわけではない」と。「むしろ自分は聴者の世界で緊張感を保ちながら聴者になろうとしてきたし、聴者の世界で言い訳をせずに評価されようとしてきたんだから、コーダの世界にいくと慰め合ってる感じになっちゃうんじゃないか」と。「そういう自分が想像できるからそうなりたくない。」っていう人がいました。暮らす社会によっては、人はむしろ自分の属性を消す方向にいくことで適応する術を探るのかもしれない。

間瀬：なるほど。ありがとうございます。この映画と、そして、松井監督の今日のお話で、それらがなにかブレイクスルーになって、本当にたくさんの問いが新たに浮かんできていています。コメントも、本当にたくさん、いただきました。ご紹介できませんでしたが申し訳ありません。監督さんに必ずお読みいただきますので、どうぞお許してください。

今日は学園祭で、学園祭の終わりの時刻を過ぎているので、この教室を出るとすぐ、早く出てくださいなんて急き立てられるかもしれませんがそれもどうぞ、お許してください。今日は、こんなにたくさんの方々が、松井至監督の『私だけ聴こえる』上映会にお越しくださり、トークショーに参加いただき、本当にありがとうございました。松井至監督にもう一度拍手をお願いいたします。

松井：ありがとうございました。

ありふれたユニークさについて語るとき (2024年10月12日『私だけ聴こえる』上映会感想)

酒井祐輔

「マイノリティ」とか「障害」といった表現が出てくると少し身構える。自分がよく知らない属性をもった人を傷つけないためにはどうしたらよいのか、どういったことに気を付けたらよいのかと考える。たしかに自我のありようは様々で、ひとくくりにできないことがあまりにも多い。ひとくくりにできないものを無理やりひとくくりにしてきた、あるいはひとくくりにできていることにしていた時代が長くあって、それがもう立ち行かなくなっているというのは、どちらかといえば好ましいことなのだろう。

一方で、そうした動きのなかで語られにくくなっていることもあるのではないかと思うこともある。様々な違いがあったとしても、眠りや食事、他の人から気にかけてもらうことを欲し、必要とするといったところでは誰もが同じだ。友達との関係で悩んだり、時に家族を疎ましく感じたりしてしまうといったことも、誰もがたとえば言い過ぎかもしれないが、かなり多くの人が身に覚えのあることだろうし、それは耳の聞こえない親のもとで育ったコードの人でも変わらない。『私だけ聴こえる』はそのような当たり前の事実気づかせてくれるドキュメンタリー映画だ。

フィクショナルな映画作品に目を向けてみると、『コード あいのうた』（アメリカ、2021年）や『僕が生きてる、ふたつの世界』（日本、2024年）など、ここ数年でコードの人を主人公にした映画のメインストリーム化が著しかったわけだが、こうした作品では、田舎に暮らす家族と、そこから離れて単身都会で暮らそうとする主人公という対比が強く働いていた。田舎から都会への痛みを伴う移動は、コードであるかどうかに関わらず、いまでも多くの人が経験していることだろう。コードの人たちに取材した映像作品を観ることで、人々は長いこと顧みられなかった自分たち自身の経験

に出会い直しているのかもしれない。

現代人は物語に工業製品と同じような意味での「新規性」を求めがちだが、そのような欲求がどこまで「自然」な欲求なのかは少し疑ってみてもよい。物語を消費するためのものだと考えるなら、「ありふれた」物語が陳腐と切り捨てられるのは当然かもしれないが、物語を人が自分の経験にカタチを与えるための技法のひとつだと考えるならどうだろうか。すでにたくさんのひとによって経験済みのことだったとしても、その事実の存在だけで、自分がそれを経験しているということの切実さが薄れることはない。その経験が語られ、通訳され、共有されるなかで、社会としての私たちは少しずつ癒されていくのではないか。

身体の共有とコミュニケーション （『私だけ聴こえる』上映会報告書）

山口晋平

2024年10月12日宮城学院女子大学にてドキュメンタリー監督である松井至氏がコーダ（Children of Deaf Adults）について取り扱った映像作品『私だけ聴こえる』の上映会及びポストトークショーが行われた。『私だけ聴こえる』は親族、特に親が聾である子供たちを複数人取り上げ、カラージュ的にコーダという「人種」を描き出した映画である。近年文学における身体表象の可能性が見直されており、アメリカ文学と身体をテーマに研究を進めている私にとっても、ディサビリティを抱える親と子の間で手話という身体言語を通したコミュニケーションを描いた本作品は身体の持つ可能性に気づくきっかけとなった。

松井監督とお話した時に印象に残っている言葉は多いが、その中でも「撮る者と撮られる者の二項対立を無くしたい」という考え方は特に印象深い。ドキュメンタリー形式の映画においてインタビューと撮影が行われるわけだが、そこには撮る者と撮られる者という関係性が構築され、その間には境界線が生まれる。撮られる者は撮る者のカメラに所有され、一方的に消費される側に立つことになり、自然とそこには対立関係にありがちな優劣が生まれてしまう。松井監督はこの二項対立を解消し、境界線を無くすことで撮られる者との視点の同化を目指していると語る。この優劣を解消するためと思われるが、監督は何かを撮る時、「カメラを身体化する」感覚があるのだという。この松井監督の感覚は個人的に興味を惹かれる発言であった。松井監督が使ったこの表現は、自身の身体とそこから物質的に切り離されたカメラを同化させる感覚を経て、本来カメラに残るデータを同時に自身の身体にも刻み付けるイメージを想起させる。カメラで撮影した対象者のメッセージを自身の身体に植え付ける感覚があるのかもしれ

ない。こうして身体化したカメラは「撮る者—カメラ—撮られる者」の間に存在する壁、境界線を取り払うことに成功する。これは撮られる者の声が撮る者自身の中に昇華されることを意味する。監督の「カメラを身体化する」感覚とは撮られる者の声を直接自身の身体に刻み付け、共有していることの表れとしても解釈できる。

これは『私だけ聴こえる』が描く「手話」のモチーフにも共通することだと言える。手話とは言うなれば発信者と受信者との間で身体を共有する言語である。発話とは身体が持つ情報を発信することに外ならないが、手話はより直接的・身体的に情報を表象するため他者との関係性を音声コミュニケーション以上に強くする可能性がある。思えば『私だけ聴こえる』の中で描かれたものも手話を通して他者との繋がりであった。作中では聾者同士のコミュニティ、コーダ同士のコミュニティ、そして手話を必要としない人々、それぞれの関係性が手話を通して描き出される。例えば作中聾を抱える母親が聴こえる娘に対して、「いつまでも聾を心に抱えて生きて欲しい」と語るシーンがあったが、この家族のコミュニティを成立させるのは手話を通して身体の共有なのである。さらにこの母娘は最終的に同じ刺青を同じ場所に入れている。共感を意味する「シンパシー(Sympathy)」とは「Syn（共に）+ pathos（苦痛）」を語源とし、痛みの共有を元々意味するが、その意味でも間違いなくこの刺青を共に刻む行為は二人の身体性とそのつながりを強調させる。彼女たちは手話と刺青によって同じ身体感覚を共感し、互いのつながりを強めるのである。

今回実施された『私だけ聴こえる』上映会のテーマの一つは身体を通して他者との結びつきだったのではないだろうか。松井監督の語るカメラの身体化、そして撮る者と撮られる者の間にある境界線の撤廃、さらに『私だけ聴こえる』における手話を通して身体を共有し、連帯感を強める人々、これらは身体の持つコミュニケーションの新たな可能性を私に示してくれた。

上映会企画立案から実施までの「声」の記録

間瀬幸江

はじめに

『私だけ聴こえる』では、コーダが自ら表現したいことを語り、それを松井至監督が聴き、カメラを介するとそれがどのような映像になるかの理解を共有してから、撮影が行われたという。そうして蓄積されたシークエンスのまとまりが、この映画である。ナイラさんから一度強い拒否の意志が示され制作がストップし、その後1年を経て、コーダたちが「ディレクターになる」という方針が共有されて制作が再開された後はとりわけ、この撮影方法が取られたという。

こうした舞台裏を私たち一般客が知っている理由は、松井監督もまた、語る人だからである。『私だけ聴こえる』の上演パンフレットは、掲載テキストの8割ほどが、監督自身によるふりかえりである。また彼は、今回の企画のみならず、さまざまな場所で、上映後のポストトークなどに赴き、撮影の裏話をことばを尽くして語る労を取り続ける¹。

『私だけ聴こえる』はしたがって、被写体も撮影者も、気持ちや気づきなど、声をことばにする場を保障されている。この「約束事」が、それを目撃する私たち観客もまた語り手になることをゆるやかに誘う。誰にも言わないでおこうと思っていた過去や、自分自身気づいてさえいなかった、ことばにされるのを待っていた過去が、鑑賞後にふと浮かび上がってくる。企画実現に至るまで何度もこの映画を見た筆者にもまた、語りたい、書き残しておきたいことがいろいろある。以下、それをなるべく書き記すこと

¹ 10月12日のポストトークは文字起こしをして本報告書50～61頁に掲載した。このポストトークと響き合うテキストが別途発表されているので併せて参照されたい。「人に潜る 松井至 第9話 光を読む 『私だけ聴こえる』①②③」、ウェブサイト『信陽堂編集室』内「草日誌」所収。URL：<https://shinyodo.net/diary/>（最終閲覧日：2025年1月11日）。

にする。

それらは大きく二つの軸を持つ。ひとつは筆者と作品との出会いから英文学科のメンバーとともに企画の基盤を作るまでの足跡である。もうひとつは、ある種の当事者意識をもって映画鑑賞に臨んだ、筆者の担当授業の履修者のうち 11 名の、「声」の記録である。

1. 企画の端緒から事前勉強会開催まで

企画の発端は、2024 年度から英文学科で「手話」が授業科目となったことと、新学科の「コミュニケーション」の部分の一端を担うことを要請され学科に新規加入する予定の筆者のごく個人的な映画鑑賞体験という、二つの異なる出来事が偶然に、時をほぼ同じくして起こったことにある。両者を地続きととらえた筆者が、英文学科スタッフのサポートを得つつ、企画立案を主導した²。

『私だけ聴こえる』と筆者との出会いは 2022 年 7 月 30 日、フォーラム仙台で行われた、監督登壇によるポストトークを伴う上映にまで遡る。私事だが数年来の体調不良に加え、2022 年 3 月の震度六弱の揺れのショックから始まった突発性難聴と喉の閉塞感を抱えつつ、自らの科学研究費課題のための聴き取り調査出張を終えた翌日で——感染症拡大の規模が著しかった第 7 波のあおりで、準備は難しく苦しかった——、心身の癒しを求めてフォーラム仙台のサイトを眺めてこの作品の上映を知り、即座に鑑賞

² 作品のなかで、ナイラさんの友人で、彼女から手話を教わるなど学びを得ようとする人の一人が、ろうとコードとの違いを十分理解していない様子が描かれるが(「友人：僕はまだきみのようなろうのことをよくわかってなくて」「ナイラ：ろう?」「友人：あ、ちがう、コードだね」「ナイラ：いや、いいわよ、気にしないで」)、企画を立ち上げる段階の筆者の立場は、彼に近い。英文学科が「手話」を学ぶ講座を開設したことと、コードについてのこの映画を観ることを地続きに語るには、いくつもの補助線が必要であったことは当時はまだ認識できていなかった。2024 年度初頭に着想した「手話習得者・学習者間のつながりに関する実践的基礎研究」という研究課題名と、本報告書の内容は合っていない(「手話」の受講生たちからは、鑑賞の感想をほとんど得られていない)。

を決めた。松井至という名前を知らなかったし、コーダという呼称についても、アカデミー賞受賞作『コーダ あいのうた』(Coda, 2021)の作品名で聞いたことがあるに過ぎなかったが、果せるかな忘れがたい鑑賞体験となった。スクリーンに現れたコーダたちの姿と発せられる声が、自分の声なき声がうごめく場所の扉を柔らかにノックする、そんな感慨を抱いた。2023 年秋、新学科設立に向けての作業部会でこの映画について話題にし、共感を得た。おかげで 2024 年春、監督の招聘を伴う上映会開催を、本学人文社会科学研究所に在籍する英文学科メンバーによる共同研究企画として立ち上げ、予算化できた。

オープンキャンパスを兼ねる学園祭企画でもあったため、自分以外の人々の映画への感想を事前に把握し、企画当日に来場する客層の多様性への想像力の踏み台とするために、2024 年 8 月 5 日に英文学科所属教員、大学院生 2 名ならびに研究所助手と筆者で集合し、作品研究と意見交換の場を持ち、いくつかの重要な知見を得た。

事前学習などをあえて入れずに鑑賞した大学院生からは、「コーダということばもろうということばも両方とも知らない」マジョリティ層は、日ごろ「知らないがゆえにいたずらに恐怖を感じたり、どうしていいかわからない」でいると思われるため、この映画を鑑賞することは、その現状から一步踏み出すきっかけとなるとの意見が寄せられた。また、よりよい鑑賞会とするために、被写体を消費するのではない視点の取り方のための事前の情報提供も必要ではないか、といった意見も寄せられた。

そして、日本語を母語としない教員からは、コーダの置かれた状況を、自らが置かれた文脈に置き換えてとらえる視点について、言語化がなされた。ある教員からは、日本で暮らすようになった初期の頃、日本語でなくわざわざ英語で話しかけられるたびにそれを重たく感じ、英語ができないふりをしたことがあったこと、そして、「英語が話せなくなりたい」という気持ちを持っていたことがあるとの回想が語られた。この感覚は、ナイ

ラさんのいう「耳が聴こえない人間になりたい」という感覚と「似ているかもしれない」。また、他の英語母語話者教員からは、いわゆる「ハーフ」の子どもたちが日本で置かれている状況もまた、コードの置かれている状況と似ているのではないかとの指摘があった。

その他の教員数名からも、「二つの世界に属するがための生きづらさ」のテーマは、なかなか表面化・言語化がされにくいのが、この映画では、コードの置かれた状況をコードの視点で描くことによってそのテーマの可視化に成功しているとの感想が出された。また、「聴こえなくなりたい」というナイラさんのことばは、実感としてはつかみがたいが、だからこそ非常に重要な、コミュニケーションの概念の根幹にかかわる問いを含んでいるという点で、意見の一致をみた。

また、コードとは「どちらにもなれる人」なのかと思っていたが、「どちらにもなれない」辛さを抱えていると気づいたとの意見もあった。人は「種族」や「カテゴリ」に属し安心を得たいと願うものだが、その安心は、他のカテゴリからの分断を引き起こす。たとえば、「SNSなどで人とつながろうとしてなお感じる、コミュニティに属せない難しさや辛さ」にも相通じると考えると、実は「誰もがピンとくるのではないか」という話になった。

さらに、鑑賞回数を重ねたり、意見を交換しあうことで、視点の取り方が変化したり複数化することもわかった。登場するコードによって置かれた状況は様々で、また一人一人が映像の中で成長したり人生の選択に迷ったりするので、常に新しい発見がある。筆者は2022年7月の最初の鑑賞時は、最も多く登場するナイラさん（自分以外の家族が全員ろう）を気に留め、ジェシカさん（母だけがろう）の母親への態度を不快と感じたが、この日の鑑賞や意見交換を経て、ジェシカさんの中に自分自身を見出す感覚を新たに得た。初回鑑賞時の自分は、「障がいのある人には親切に」という「お仕着せの善」の尺度だけで映像を見ていたかもしれないと思う。

意見交換会を踏まえて、10月のポストトークでは、被写体となった人々と監督の関係性の変遷について特にお話をさせていただきたいと改めて思った。また、コーダに関する基礎知識が、来場者によってまちまちであることを念頭に置くよう意識することにした。また、ポストトークのために手話通訳をつけることも併せてここで確認された。そして、鑑賞後の語り手が多いほどこの映画がもたらす視点は増えるとの実感から、筆者の後期担当科目「リベラルアーツ総合 A（声）」で、副教材の位置づけでイベントへの自由な参加を呼びかけ、参加者から感想を募ることとした。

2. 「声」≡「権利」の視点を学ぶ学生鑑賞者たちの証言

「リベラルアーツ総合 A（声）」は、宮城学院女子大学一般教育科目の一つで、2年生の後期に開講される講義科目である。「声」以外にも4つのメニュー（生物、平和、ことば、東北）があり、履修者はこの5つのメニューのうち一つを選択する。いずれのメニューも、専門の異なる二名の教員によるオムニバス形式で、共通のテーマを異なる視点から論じる力を育むのが科目設置の主旨である。2021年度から開講されており、全学科・専攻で必修である。

筆者は2021年度から「声」のメニューの7回分の講義を担当している。講義の軸となるのは、自らが自らの声の主体になるとはいかなることかという問いである。筆者の専門領域との兼ね合いから、初回授業ではまず、日本語の「声」とフランス語の「VOIX」の意味領域の違いすなわちシティズンシップ概念の濃淡に触れ、日本では民主主義がうたわれているがその精神的基盤としての権利教育が実質的に抜け落ちており、そのため何らかの形で社会制度から取りこぼされた人々がそのことを社会に伝える術を、より持ちがたい可能性があると説明している。二回目以降は、日本やフランスの、近代から現代までのさまざまな事例を（市民権を認められなかった時代の女性たちの声、セクシャルマイノリティの声、子どもの人権と声

の事例などから)紹介していく。講義の暫定的結論として掲げているのは、声をあげられる社会とは声をあげる勇気ある少数者を称賛する風潮よりも、むしろ声が聴かれる仕組みを持つ社会のことであって、今を生きる私たちはその仕組みの実現のためのバトンを手に分の身体で走るランナーのようなもの、という認識である。

2024年度の「声」の履修登録者143人に、10月の上映会企画への自由な参加を呼び掛けるとともに、コーダという呼称についての予備知識を授業の冒頭の5分ほどを使い数回に分けて伝えた。その結果、11人から感想文の提出があった。原文から抜粋し引用する。

Aさんは、感想の後段で、ジェシカさんのことが印象に残ったと述べている。

印象的だった場面は、コーダの子が家でパーティーをする時に、母親の言う事を無視したり、親と離れるために遠いところへ進学する場面です。ここにろう者の親がいて、自分は聞こえたまま生活してる事での葛藤や悩みが現れていたように感じました。また、ろうになりたいという言葉もとても印象に残り、気づかれにくいコーダの存在やコーダが抱えている悩みがもっと注目されていくといいなと思いました。

Bさんは、「コーダ」という呼称が必要になった理由への理解について述べている。

『私だけ聴こえる』の映画を見て、最初は耳が聞こえる人と聞こえない人という2つの分類があると考えていて、耳が聞こえるのに聞こえる人とも聞こえない人とも違うという「コーダ」という分類がある

のが少し疑問に思っていた。しかし今回の映画を見て、聞こえる人と聞こえない人とはどちらとも境遇が違く、様々な思いを抱えているということが分かり「コード」いう分類はあるべきなのだった。映画を見て、聴覚障害を抱えている人のつらい気持ちも分かったが、聴覚障害の親を持つ耳が聞こえる子どもの気持ちもどれだけ複雑でつらい思いをしているかが分かった。私は耳が聞こえることはとても良いことであり誇らしいことだと思っていたが、コードの方からするとただ耳が聞こえるということで親の気持ちも考え自分がどのように聴覚障害者と関わるか、耳が聞こえる人と関わるかを考えることはとても大変であり辛いことだと思った。

映画の最後の「私は私のままでいる」という一文にとっても感動し涙してしまっただが、ありのままの自分を出すのは自分でさえも大変だが、様々な事情を抱えている人にとってはものすごく勇気がいるものである。そのことを理解し、私はこれから聴覚障害者ともコードの人とも平等に明るく関わりたいと思った。

Cさんは、小学校か特別支援の教員志望で、映画のなかでのコードたちの様子を詳しく記録している。

自ら通訳をしているコードの子もいれば、通訳することにうんざりしているコードの子もいることを初めて知った。私は、通訳することによってうんざりしているコードの子もいることを知らなかったのだから、知ることができて良かった。聴覚障害者の父が迎えに来ると友人に言ったら、どうやって迎えに来るのかを聞かれ、車で来ると答えたら、そんなことできるわけがないと言われた子がいた。車で迎えに来てくれることに納得しないで、聴覚障害者にはできないと決めつけているコードの子の友人に驚いた。私なら、そうなんだと納得するからだ。

また、知ることができて良かったと思う。差別をする人は、聴覚障害者について知らないからだと思っていたが、そもそも知ろうとしない人もいることに気づいた。なぜ知ろうともせずに、聴覚障害者は運転できないと決めつけるのか理解できなかった。

コーダの子どもたちのキャンプでは、子どもたちがとても生き生きしていた。コーダは、聴者の中でも聴覚障害者の中でも生きづらいととても感じた。コーダの子の「自分らしくって言われるけど、自分らしくすると受け入れてもらえない」という言葉がとても印象に残っている。コーダのことを知らない人が多いからだと思った。コーダについて知るきっかけを作ることと、コーダの人たちが繋がれるようにキャンプのような集まりをすることは大切だと考えた。

私は将来、小学校か特別支援学校の教員になりたい。小学校に周りとなじめないコーダの子がいるかもしれないと考えた。コーダの子にも目を向ける教員になりたい。また、支援学校で聴覚障害のある子に手話で会話できるようになりたい。

Dさんは、コーダたちの人生の選択のありように、自分の思いを重ねている。

『私だけ聴こえる』の映画を見て、私はコーダの人が常に持っているプラスではない感情を少し知ることができた。私は耳から音を聴き入れることができ、私の親や周りの人も私と同じである。そして、世界全体を見てみても、人の声を耳で聴きとることができる人の方が多い。そのため、私は聴覚障害の人や、コーダの人の気持ちを完全に理解することは難しい。しかし、映画の中でコーダの人が実際に苦しんでいた、「周りからの視線や評価」。それは私たちが、耳が聞こえることが普通と思っているからこそそのものではないかと私は感じた。私は、

普通は存在しないと考えている。皆それぞれ個性があるからこそ人間社会は成り立っているのではないか。コーダの人が「コーダはろう者、聴者、どちらでもない。どっちの世界にいてもいい。」と言っていたこのことが私はとても心に響いた。どちらの世界にいたべきかを決めるのは、第三者の人間ではなく、本人である。そしてこのことは、すべての人に共通して当てはまることだ。周りから反対されたり、あまりいい顔をされなかったりしたとしても、その後に次の行動をするのは紛れもなく自分自身である。どのような決断をしたとしても必ず結果は出る。自分がやりたい方の世界にいても、両方にいても良いということをお前は学んだ。自分に正直になって行動していいんだということをお前が映画から感じた。

Eさんは、映画から得られたコーダの視点から見える世界の、言語化を試みている。

親がろう者だから手話での会話は自分の中で当たり前だった。だから手話はもともとみんなができるものだと思っていた。だが学校に行ってみると違うことを実感して初めて親がろう者だと知った。自分も会話に混ざりたくても手話で通訳をする場合には通訳に忙しくて会話に混ざれないなどの不利益があるため、コーダの中には通訳がつかれたと感じる人が多い中、自分からしたら聞こえてなおかつ手話もできるから聞こえる世界と聞こえない世界の2つの世界をつなげてうれしいのに声での会話ではなく、手話での会話を笑ったり、異端児扱いしたり、宇宙人扱いしたり笑ったりされる。また周りから「知っている手話は中指を立てる手話だ」と手話で遊ばれたりするのもそういう考え方しかできない聴者を逆にかわいそうだと怒りをあらわにしていた。これを見て、確かに学校に行く前まで会話のときに手話しかし

てこなければそれが当たり前だと思うのは普通である。だがそれを知って本人は1番驚いたにもかかわらず、自分は手話で話せることがうれしいと思えた人に対して周りの人はなぜ手話での会話を馬鹿にする発言をするのか、なぜ手話を嫌悪するように見るのか私は理解できなかった。

学校では、少しでも笑われないように自分らしくいることをやめ、独りよがりで大人数自分を演じて、家族の前では、普通の家とは違う中、明るくてのんびりと2つの性格を使い分けることは自分は二重人格のように過ごしているようだ、自分は聴者からも聾者からもはみ出し者だという言葉聞いたのと、コーダキャンプに行ったナイラを見て生き生きとしている姿、やっとなコーダである自分の気持ちに共感してもらえる人たちを見つけた喜びからコーダの人たちは私が思っている以上に辛い思いをして私が今日知れたのはほんとに一握り分だけで計り知れないほどの苦悩を感じていると思った。だからこそ自分の居場所を求め続けるのではないかと推測した。この映画はコーダの人からの目線がよくわかる映画であった。

Fさんは、他者と自己の境界に思いを馳せている。

映画を観て、コーダの方たちの生活や抱える思いが前より具体的にイメージできたけど、どんなに話を聴いてその人のことがわかったと思っても、すべてを理解することは難しいのではないかなと思った。自分とはちがう人と関わる時、どう接したらいいのか、どこまで踏み入っていいのか、距離がわからなくて、壁ができてしまいそうで、怖い、と思った。でも、あなたのことを知りたい、という気持ちはずっと持っていたいと思うし、それが伝わったらいいなと思う。

Gさんは、パンフレット（映画のフライヤー）に書かれたナイラさんのことば「ずっと、ろうになりたかった」が鑑賞の起点になったことを書き記している。

パンフレットにも書いてあるように「ずっと、ろうになりたかった」という言葉が印象的でした。障害がなく産まれることは奇跡で嬉しいことなのに、なぜろうになりたかったと思うのか疑問に思ったからです。私は、この映画のことを知るまで CODA という言葉を知らず、CODA の葛藤など CODA について考えることがなかったので、CODA について考えるいい機会になりました。手話も口語もできるというのは誰にでもできることではないすごいことなのに生きづらさを感じている人がいるということが残念でした。そのような人たちが堂々と生きていくことが出来るように、CODA について理解している人が増えてほしいし、偏見などで人を差別するようなことを絶対にしたくないと改めて感じました。CODA でなくても、世界には自分の居場所がないと感じている人がいるのではないかと考えられるので、コミュニケーションが取りやすい、理解し合えるような社会になってほしいと感じました。

Hさんは、生きやすさ、生きにくさは本人の責めではないと述べる。

どんな環境で、どんな身体で産まれてくるかによって、こんなにも生き方や生きやすさが変わってくるのだと深く考えさせられるドキュメンタリーだと思いました。

また、1人だけ聴こえないのではなく、聴こえてしまうというのが、親にとっては健康な身体に産まれたけれど、どこか少し悲しかったのかなとも思いました。

Iさんは、人はひとりでないときにはじめて声を持ちうるという気づきを記録している。

この作品を見て、同じ境遇の仲間がいるというのはとても心強いことなのだと感じた。学校でも障がい者の子供という理由で、ろう者からも耳が聞こえるからという理由で距離をおかれてしまったが、孤独であるコーダたちも、コーダたちのキャンプでは楽しく過ごしていた。耳が聞こえることは幸せなことなのに少し境遇が違っただけでそれは不幸せなことになってしまうのだと改めて感じた。15歳という年齢でまだ若いのに辛いことがありながらも強く生きているナイラさんを見て私も辛いことがあってもがんばろうと思えた。

私は聴覚障害を持っていないが、障害を持っていないからこそ聴覚障害の方の助けになることが出来る。今後聴覚障害を持っている方に会った時は、自分から積極的に声をかけ、スマホや紙を活用しながらもし困っていたら助けになりたいと思った。また、この作品をきっかけに手話にチャレンジしてみたくなった。人間関係の複雑さや孤独感、相手を理解すること、されることの大切さが描かれてるように感じた。

Jさんは、鑑賞直後にあふれ出した気持ちを、数日後に書き記せたと述べ、特にナイラさんに思いををせ、自らが受講中の手話の授業（本報告書 67 頁に述べた、英文学科開講科目のこと）での実践についてのコメントも残している。

映画を見て、視点が複数あり、それぞれ異なる考えをしていて、とても一緒くたにこうだと述べることができないと数日経ちましたが、思いました。

講演会で、監督の方が映画を撮る時のエピソードを話されていて、映画を撮って行くにつれ、コーダの方が前向きになったり、また挫折というか悩みに触れて中断せざるを得なくなったりととても大変だったのだろうなと思い、それだけでなく、映画自体に嘘がない。映像だとは思えないほどの、この重みというものに対してこれだけのエピソードがあったということにとっても驚きました。

特に私が映画の中で印象深かったものは、ナイラさんです。

兄弟と家族は耳が聞こえない、だが、1人だけ聞こえている。その子が私も耳が聞こえなかったらもっと家族のことがわかるのに、と涙して聞こえる耳に感謝するのではなく、聞こえなくなりたいと心から思っている人を初めて見て驚き、見ていてとても思考に興味を持ちました。その方は同情はいらないといっていて、私は聞こえる人は聞こえない人を助ければ良いとただ単純な思考回路だったのですが、そうでは無いことに深く考えさせられました。現在手話を授業で受講していますが、とても難しいと感じることもあり、言葉で声で話し聞くことに慣れている身であるためにより一層努力が必要だと改めて感じました。

Kさんは、コーダたちの様子に、日ごろからの自分の心持ちを映して観た。

『私だけ聴こえる』で一番印象に残っているのは、MJの「私たちはろうの世界にも聴こえる世界にも居場所がないのではなくて、どちらの世界にも居場所があってどちらも私なんだ」という言葉でした。これは飛躍しすぎていると自分でも思うし、的を射ている感想とは言えないかもしれませんが、今までの自分の在り方が肯定されたように感じました。今まで気分が沈むと、決まって葛藤に苛まれていました。極端に言ってしまうと、「死にたい」のに「生きたい」とか、家族の

ことが「大好き」なのに「大嫌い」な時があるとか。ゆくゆくは向き合っていかなければいけない問題です。なので、映画を見てそんなことを思う自分を「許す」とか都合のいい解釈をしてしまうのも、また、違う気がします。だけどそんな自分を、真っ向から否定しなくてもいいんじゃないかな、と思いました。良い自分も悪い自分も紛れもない私なのだと、一種の諦め（良い意味で）にも繋がりました。

3. 企画を終えて～「自分のことば」の萌芽を見つめながら～

上映会の同日夕刻、松井さんとの対話をさらに深める目的から、市内の別の場所（錦町の喫茶 frame 内「星空カフェ」にて）で「囲む会」を開催した。監督が映像制作を始めたのが東北においてであり、しかも 2011 年 3 月の震災直前の時期にあたっていたことや、その後震災の被災者の声を映像にした作品を多く撮っておられることなどから、石巻出身・在住の造形作家ちばふみ枝さんの、被災した家と亡くなった祖母についての語りのドキュメンタリー『家は生きていく』を鑑賞、フリートークを行った。松井さんとちばさんの両方が作者としてクレジットされている作品である。ちばふみ枝さんご本人も同席くださり、映像に現れ語る人と、映像を撮る人の両方の声を一度に聞くことのできる機会となった。また、会合の終わりに、母親の持っていた指輪に気持ちを寄せながら作品を作り続ける関西の指輪職人のドキュメンタリー『ゆびわのはなし』も上映いただいた。

日中の上映会に加えて、この企画にも参加した K さんは、先述のコメントに加えて、次のことばを残してくれた。

「諦め」という点で言うと、『家は生きていく』『ゆびわのはなし』を見て、また囲む会でのお話を聴いて思ったのは、どんなに頑張っても、寄り添おうと思っても当事者にはなれないということです。苦しみも悲しみも幸せも自分のもので、相手に 100 パーセント伝えること

ができなければ、分かってもらうこともできないのだと突き付けられたような気もしました。それを知って何かが大きく変わるかと聞かれれば、きっと変わらないですが…上手く言葉にはできませんが、私にとってとても大きな学びとなったのは確かです。

新学科でうたう「コミュニケーション」とは何か、という問いかけがこの企画の出発点にあったことは、本報告書のはしがきで述べた通りである。インターネットというインフラの存在が「あたりまえ」となった現代、私たちは、24時間なにかと「つながっている」。SNSなどで送受信されることばの一つ一つが、はからずして自己を他者へとつないでしまう。だからこそ、よりうまく、より正しく、より親切なことばを持つことを、私たちは社会から常に要請されている。しかし私たちの心や身体は、そうしたメディアーションの力を内蔵して生まれてくるわけではない。その力の種類や指向性や強度・硬度あるいは弱度・軟度は、人によってまちまちである。

だからこそ、「分かってもらうことはできない」という小さな気づきと覚悟の先に、今の時代の真のコミュニケーションのありかたを探したい。そのことはとりもなおさず、「自分の考えや意見と他人の考えや意見を区別できる」ことにほかならない。現代メディア社会は、「他者とつながれる能力」をその構成員全員に求める圧力——それは文脈によっては暴力でさえあるかもしれない——を内包している。だから、自分の考えやことばを、他人のそれとを分けることは、かつての社会よりも難しくなった。難しいどころか、それは時として大きな亀裂や断絶を生み、私たちを孤独に追いやるかもしれない。思えば、ナイラさんが松井監督に差し向けた、「あなたにはコードのことはわからない」のだからあなたのことばで勝手に私を語らないで、という宣言は、そうした断絶のひとつの現われであったかもしれない。

この長い報告書の締めくくりに一つ思い出されるのは、ナイラさんのお

父さんと松井さんのつながりである。制作がストップして数か月が過ぎたあと、ろうであるお父さんから「この映画をいいものにしたい」という意向が伝えられ、そのことが、ナイラさんと監督の新たなつながりの萌芽になっていった。ここから私たちが学ぶのは、他者との断絶がそのまま、社会からの遮断とは限らないという気づきだと思う。他者と自分の主体性が別個のものとして並び立つ可能性は、他者も自分もそれぞれに、何か別の他者とつながっているところに生じる。

そしてそのつながりはささやかで個人的で、素朴で小さなものであるかもしれないのである。

おわりに

『私だけ聴こえる』の上映会企画を通して、実に多くの人々の「声」を聴くことができた。また、それらの「声」を聴く主体としての自分の輪郭を、この報告書を著すことで残せた。「コミュニケーション」の名を冠する新たな学科もまた、たくさんの「声」を聴き合い、そこから自らのことばの萌芽をつかむ、そうした機会を創出できる場でありたい。非力ながら、その場を守り支える役目とはいかなるものか、今後ずっと、問い続けていくことになるだろう。

2024 年度 英文学科生の活動



ESL (English Speaking Lounge)

楽しく、無理なく、身につく英語力

1 年 佐藤 愛莉

私が ESL に参加したきっかけは、無料で英会話ができるからです。高校生の頃、フィリピンの方と話すオンライン英会話を受けていました。しかし、話せる回数が決まっており、費用も高く、好きなだけ先生と話せるような機会はありませんでした。一方で、ESL は無料で 1 回 15 分間なので、空き時間に無理なく続けられるという魅力があります。

ESL を始めたころは言いたいことがあっても英語で伝える方法が分からなかったり、先生の英語の話すスピードが速くて聞き取れなかったりすることが多かったのですが、今では始めの頃よりも英語が聞き取れるようになり、さらに参加する前に話す内容をあらかじめ決めておくことや、おすすめされた映画や曲を実際に見たり聴いたりすることで、先生との会話も



Yoshiko 先生との ESL の様子（本人左）

弾むようになりました。さらに、英語の勉強法の話や、文化の違いの話では知らなかったことをたくさん学ぶことができました。例えば、フォニックスを理解することで知らない単語の読み方が分かるようになり、洋楽や洋画に触れることも英語の勉強になると知りました。その他にも、クリスマスはターキーやチョコレート、シュトーレンを食べるのが一般的で、フライドチキンやクリスマスケーキを食べるのは日本の文化だと知り驚きました。

またグループ ESL に友人と参加した際、友人から、「以前より自分の意見を英語で積極的に話せるようになってすごいね」と言われたときは本当に嬉しく、これからも ESL を続けていこうという意欲がわいてきました。ESL では Speaking はもちろんのこと、Listening、話す表現力、単語力も上がり、知らなかったことも色々学びながら楽しく会話できるため、4月の入学時よりも積極的に ESL を活用しています。

4月から今まで続けてきて少しずつ英語力が向上しているので、これからも ESL を続けて英語力を伸ばしていきたいです。また、英語力の向上に加え、授業で学べない他国の文化や生活習慣を知ることができる点も大きな魅力です。ESL は私にとって有意義な学び場となっています。

英語を学び続ける理由

2 年 工藤まりん

私が英会話を学び始めた動機は、学校のスピーキングの授業で先生に話しかけられることが多かったものの、うまく答えられない自分に悔しさを感じ、もっと話せるようになりたいと思ったからです。最初は緊張の連続でしたが、英会話を続けていくうちに、だんだんと先生たちの話す内容が理解できるようになり、自然に相槌を打つ方法やスラングを学ぶ楽しさを

味わうことができました。そのおかげで、次第に英語で会話する時間を心から楽しめるようになりました。

2年生になり、夏のイギリス海外研修を意識し始めると、ただ楽しく会話をするだけではなく、もっと多くの英会話体験を積みたいと考えるようになりました。英語を使って話すことに加え、相手に自分の考えをしっかりと伝える力を伸ばしたいと思うようになり、積極的に授業や自主学習に取り組むようになりました。

しかし、ESLの授業では、自分が知らない単語や表現に直面することも多く、話題によって英語で説明するのが難しいと感じる場面も多くなりました。日本語で話したいと考えることもありましたが、私は「イギリスに行けば日本語を理解する人はいない」ということを意識し、なるべく自分が知っている英語の語彙や表現を駆使して話そうと努力しました。それを先生が理解してくれたときには、言葉が通じた達成感が生まれ、大きなモチベーションになりました。



Steven 先生との ESL の様子（本人右）

そして、その努力が実を結んでいることを実感できたのは、実際にイギリスに行ったときでした。語学学校で、日本語を全く知らない韓国人の友人と遊びに行ったり、ホストファミリーとその日の出来事について話し合いながら楽しい時間を過ごしたりする中で、学んだ英語を生きた形で活用できていると感じました。この経験は、英語を学び続ける意欲をさらに高めてくれました。

英語を学ぶ過程で多くの壁や課題がありましたが、それを乗り越えるたびに自分の成長を感じられる瞬間がありました。今後もこの経験を糧に、さらに多くの英会話体験を積み重ねていきたいです。

長期留学報告

カナダでの留学を経て

3 年 遠藤 みゆ

ウィニペグ大学（カナダ）

（2024.9.1-2024.12.30）

私は昨年の 9 月からカナダのウィニペグ大学で 14 週間の ELP（English Language Program）を受講しました。ウィニペグは冬の寒さが厳しく、12 月にはマイナス 30 度近くになることもありましたが、留学する環境として不自由なく過ごすことができました。

ELP では月曜日から金曜日まで授業があり、英語の基本的なスキル向上を目指して、ディスカッションやディベート、ロールプレイが頻繁に行われました。これらを通じて、さまざまなトピックでの適切な表現を学びました。また、カナダの文化を学ぶアクティビティにも参加し、博物館や動物園を訪れたり、季節のイベントやスポーツに参加する機会もありました。

滞在先はホームステイを選び、カナダ人の 4 人家族と暮らしました。ホ

ストファミリーには、明るい雰囲気の女の子が2人おり、休日には家族と過ごし、家族の用事にもよく同行しました。Thanksgiving Dayには家族や親戚と旅行に出かけ、家族の伝統行事に参加して大勢で祝日をお祝いしました。私のホストファミリーはクリスチャンで、毎週末教会へ通っていました。日本ではキリスト教に触れる機会が少なかったため、文化の一つとして学びたいと思い、実際に何度か足を運んだことで幅広い世代の人々と交流することができました。

ホームステイ当初、見知らぬ家族と4ヶ月も過ごせるのか不安でしたが、カナダ人家族の中で、自然と自分がその日常に溶け込んでいることを感じました。ホストファミリーには感謝の気持ちでいっぱい、良好な関係を築けたと自信を持っています。異文化を尊重し、自分の考えをしっかりと伝え、相手を理解しようとする姿勢が重要だと実感しました。

また、カナダは移民が多く、さまざまな背景を持つ人々が集まる国です。多様な文化に触れ合い、日常的に異なる価値観を持つ人々と関わることは



Snowman made by my host family and me

特に貴重な経験でした。一方で、私が日本人として自分をどう表現し相手と信頼関係を築くかは試行錯誤の連続でした。新しい環境で自分をどう伝えるか、どんな話題を選ぶべきかをよく考えるようになり、英語力だけでなく、新しい環境に自分から飛び込んで適応する力も養われたと感じています。カナダでは多くの新しい出会いと経験があり、英語を学ぶモチベーションもさらに高まりました。ウィニペグでの経験の全てが自分自身を成長させてくれたと実感しています。

“Friendly Manitoba” の地で学んだこと

3 年 大場 晶夢

ウィニペグ大学 (カナダ)

(2023.9.5–2024.4.19)

私は2年時後期から約7か月間、ウィニペグ大学へ留学しました。私がカナダへ留学を決意した理由は、「苦手なアメリカ英語の発音やリスニング能力を向上させたい」「ホームステイを通じて日常的に英語に触れたい」と思ったからです。また、ウィニペグ大学は在学留学ができることも魅力的で、多国籍国家のカナダでは多様性により触れられるのではないかと考え、留学することを決意しました。

ウィニペグでの生活を始めてすぐ、言語の壁に衝突しました。「店員さんが何と言っているのか早すぎて聞き取れない!」「どのバスに乗れば目的地にたどり着けるのかわからない…」そんな困難を乗り越えられたのは現地の方々の優しさのおかげでした。英語を聞き取れずに困った顔をしていると単語や易しい英文で聞き直してくれたり、バスを待っている人に話しかけると丁寧に教えてくれたり、その優しさでウィニペグでの生活に馴染むことができました。ウィニペグのナンバープレートに書かれた

“Friendly Manitoba” の言葉が示す通りマニトバの人々はとても温かく親しみやすいと実感しました。

2 学期の留学生活で世界 15 か国に友達ができました。今でも彼らとは連絡を取り合ったり、日本に来た際には宮城県の観光名所を案内したりと交流を続けています。多様な文化や価値観に触れることができたことは、私にとって大きな財産です。

留学を通じて英語力はもちろん、私自身も成長することができました。人前に出ることが苦手でクラスメイトに話しかけることにも緊張していた私ですが、最後にはクラス代表として終業式でスピーチをするまでに成長しました。

私は将来、英語教員になりたいと日々勉強に励んでいます。カナダで培った英語力をこれからもさらに鍛え続け、私の経験を生徒に伝え、英語に興味を持ってもらえるような教員を目指します。英語は楽しい。そう伝え続けたいです。



川の上でスケートをしているときに見つけたフォトスポット前で撮った写真

イギリス研修報告

海外研修で得た経験

2 年 北島 愛里

私が今回の海外研修に参加した理由は、長期留学を考えているものの、海外経験がなかったため、まずはグループで海外生活に慣れることを目的として参加しました。初めての海外旅行で 13 時間のフライトには不安もありましたが、想像以上に快適で、あっという間に感じました。

イギリスに到着して最初に感じたのは、8 月なのに寒すぎるということです。朝と晩の寒暖差のおかげで、滞在一週間目で風邪をひいてしまいました。それ以上に印象的だったのは、トラファルガー広場での出来事です。ある女性に一輪のバラを渡され、素敵な文化だなと思ったのも束の間、お金を求められてしまいました。怖くなりその時は £20 を渡してしまったのですが、後でこのような行為が特定の背景を持つ人々によって行われて



Oxford のトリニティ・カレッジの前で（本人右）

いることを知りました。怒りがこみあげてきましたが、この経験を「洗礼」と捉えて気持ちを切り替えました。

滞在中のホームステイ先は、老夫婦と猫が住む温かい家庭でした。Detached House という様式の家で、冷蔵庫やキッチンも自由に使わせてもらうことができました。ペアの幸穂さんと一緒に鯖の味噌煮や照り焼きチキンを作り、振る舞いました。魚介料理が苦手だというご主人も、鯖の味噌煮を美味しいと言って食べてくれたことがとても嬉しかったです。

私たちは、St Giles という語学学校に通って授業を受けました。最初はクラスで積極的に発言できず、誰かが答えてから自分も答えるという消極的な自分に気づきました。しかし、これではせっかくの機会が無駄になると思い、意識的に積極性を高めるよう努めました。その結果、週末の先生との面談で「英語力が向上している」と言われ自信ができました。やはり、自ら積極的に話す姿勢が大切だと実感しました。

この海外研修では、英語の学びだけでなく、その国の文化や土地を直接体験することができました。イギリスでの生活を通して、多くの新しい気づきと学びを得ることができ、とても充実した時間を過ごすことができました。

イギリスでの夏季研修

2 年 窪田 幸穂

私は、2024 年度夏季に行われた海外研修に参加し、イギリスのロンドンに 3 週間滞在しました。この海外研修は 2～4 年の英文学科生が対象で、1 年生の頃からとても楽しみにしていた活動の 1 つでした。私が本学入学を決めた理由もこの海外研修にあり、留学以外で海外に赴き、身近に文化に触れながら英語のみでコミュニケーションが取れる環境に身を置く機会

があるところが大きな魅力の1つであると思います。

イギリスでは、午前中は学校に行き、様々な国の人々と共にリスニングやライティング、ことわざなどを用いた文法やフレーズなど、多方面から英語を学びました。休み時間などにはクラスメイトとお互いの国の話をしたり、お菓子を食べながら授業の復習を行うなど、実用的な英会話の経験を積みながら親交を深めていくことができました。私自身、トルコ人や台湾人の友人ができ、学校後に食事やショッピングに行くこともありました。

ホームステイ先では、2人もしくは3人1組で滞在しました。家ではホストファミリーと1日の出来事を話したり、学校で疑問に思ったことを聞



ロンドン タワーブリッジの前で（本人右）

いたり、お互いの趣味や好きな物の話を毎日することで、言いたいことをスムーズに話す練習ができました。逆におすすめの観光地などの話を聞いたりする際は、内容を正確に聞き取り理解する練習になりました。

学校終わりや休日にはロンドン市内や郊外、他にも有名な地に行き、多くのことを経験しました。女性から花をもらってお金を取られたり、カードを失くして街中探したりなど大変な経験も多くしましたが、今となっては良いお土産話になったと思います。他にもホームステイ先の近くの小さな教会に行ってみたり、公園でピクニックしたりなど、たった3週間の中で数え切れないような楽しい思い出も沢山出来ました。海外研修では、語学力の向上はもちろん、人生経験も多く積めることが出来たので、今後の大学生生活、就活などでも生かしていきたいです。

私のイギリス留学体験記

3年 菅 彩乃

私は今年の夏、イギリスのロンドンに約3週間留学しました。高校生の頃から大学で英語を学ぶなら海外留学をしてみたいという強い思いがあり、念願の留学でした。この経験は私の中で色褪せることなく、きっと何度でも思い返すことになると思います。それほどまでに、私に大きな影響を与えてくれました。

この留学生活は、初めの3日間は不安と緊張でうまくいかないことが多く、既に心が折れそうになっていました。留学前に勉強したものの、現地の人の英語が聞き取れず落ち込み、クラスメートに話しかけるのもとても緊張しました。伝えたいことが伝わらないというのがもどかしく、一番苦労した所でした。しかし、時間の経過とともに耳が慣れてきて聞き取れるようになり、純粋に会話を楽しめるようになりました。毎日「当たって砕

ける」という気持ちで、自分から積極的に話しかけました。そのおかげでクラスメートたちと仲良くなることができたと思います。自分の国のお菓子を交換したり、ゲームで盛り上がったりと、とても楽しい時間を過ごすことができました。

また、私のホストファミリーは非常に親切で歓迎してくれました。毎日夕食時には楽しく会話をし、2時間も話し込んでしまったり、毎晩ディナーの後にデザートを振る舞ってくれたり、毎日駅まで送迎してくれたりもしました。私の英語力が乏しく、うまく伝わらない時でも理解するまで聞いてくれて、発音の仕方も教えてくれました。私の英語力はホストファミリーのおかげで培われたのだと思います。

私は英語を勉強しているにもかかわらず、毎日ほぼ英語だけで生活するということは初めてでした。そのため、今回の留学で英語を使ったコミュニケーションの楽しさと可能性を肌で感じ、自信を持つことができました。これから就職活動が始まる時期ですが、この経験を糧に自分のキャリアに生かしていきたいと思います。



語学学校最終日、クラスメートとの集合写真（本人中央右）

飛 躍

3 年 高橋 綾佳

私は3週間のイギリス海外研修に参加し、多くの学びと発見、固定概念に気づく事が出来た日々となりました。イギリス海外研修への思いや得た知識などを紹介します。

1つ目は、イギリス海外研修に参加を決めた理由です。私は日本ではない他国に行き、自分の英語力で暮らし、海外の文化に触れ、現地の人とのコミュニケーションを通してまだ見たことのない世界を知り、固定概念の価値観を変化させるために、自分自身で実際に体験したいという願望があったからです。大学生の時に挑戦したい留学に参加して世界を見ることが、自分自身を飛躍させたい気持ちがありました。

2つ目は、ホストファミリーについてです。私のホストマザーは元弁護士で、現在は教会で仕事をし、結婚式やキリスト教の行事などの活動を積極的に行っている素晴らしいイギリス人の女性でした。また、看護師のカナダ人の女性も一緒に暮らしていました。ホストマザーは教会やパブ、学校の送り迎え、空港へのお見送りをし、夕食を一緒に食べて、ほぼ毎日約2時間のコミュニケーションを図ってくれました。

夕食の時間などの会話のおかげで、英会話の表現、発音の仕方、様々な物の英語の表現を教えてもらい、徐々に日常会話での反応の仕方、挨拶、自分が伝えたいことをスムーズに話せるようになりました。また、ホストファミリーのお勧めの観光地、文化、食べ物なども詳しく教えてくれたため、多くの場所に足を運び、お店での注文の仕方、分からないことの尋ね方を学びました。そして地下鉄の標識を見て乗ることなどの幅広い常識や文化を体験することで、英語の4技能を多方面から身に付けることが出来ました。

私は、イギリスの生活を通して、英語力の向上、自分の意見を明確に示

すこと、自分で考えて主体的に行動していかなければ何も新しい知識は得られないことを学びました。3 週間で得た知識をこれからの生活に生かし、更に多くの面で自分を向上させていきたいです。



Big Ben を訪れた時の写真

2024 年度 英文学科活動報告



2024 年教員研究・教育活動報告

吉村典子

研究活動

大学改組に伴う業務等で多忙を極めた1年であったため、継続中の「リチャード・ハミルトン研究」に費やす時間は限られたが、海外での調査(ヴィクトリア&アルバートミュージアム、イギリス6月)、国際美術史学会での発表(リヨン国際会議場、フランス6月)、国内学会運営(モリス研究会、仙台12月)等を実施し、前には進めるができた。その成果の一部を以下に記す。

学術論文

吉村典子「リチャード・ハミルトンの《Kent State》—マスメディアのイメージと版画による挑戦」『人文社会科学論叢』34号、宮城学院女子大学付属人文社会研究所、2025年3月

口頭発表

Noriko Yoshimura, “Richard Hamilton, *Kent State* (1970): Printing Processed Images and Transforming the Subject,” Le comité d'organisation du 36e congrès du CIHA Lyon, France, June 2024.

社会活動

意匠学会国際交流委員

意匠学会『デザイン理論』投稿論文・査読

ACDHT: Asian Conference of Design History and Theory 運営委員

第9回ウィリアム・モリス研究会運営・司会(せんだいメディアテーク11月30日)

六本木アート講座&ワークショップ

『仙台経済界』連載・2025年1-2月号担当

教育活動

本誌巻末の「講義題目」の科目を担当した。学外での教育活動では、上記「社会活動」のうちの二件を英文学科生とともに実施した。一つは「モリ

ス研究会」で、英文学科3年の(以下敬称略)赤津ひかり、大村菜奈花、菅彩乃、伊藤綾佳、千葉琴羽が、公開型研究会のスムーズな運営に尽力した。もう一つは「六本木アート講座&ワークショップ」で、3年佐藤美紅が18世紀貴族の女性の間でたしなまれたタティング(シャトルに巻き付けた糸で結び目をつくりながら編むレース編・本誌52号拙稿参照)の一般向けワークショップを行い、本学オープンキャンパスでは高校生向けに行った。二件とも、社会と関わりながら、自分たちの持つ技能を発揮する良い機会となった。

また、昨年実施した英語研修施設を利用したのインターンシップが好評であったことから、今年も継続し、3年生4名が参加した。一方、新規では、仙台ロイヤルパークホテルで研修を開始し、1年生の10名が参加した(これらについては、本誌別項で紹介)。いずれも有意義なインターンシップとなったため、次年度も継続し、2026年度からは正課に組み込んでいく予定である。

遊佐典昭

研究活動

研究課題「遠隔授業は、英文法知識の獲得・定着にどのような影響を与えるのか?」は昨年に続き、遠隔授業に用いられるAIに関する情報収集と、言語理論の進展について研究を行った。特に、生成AIの急速な進展が見られるために研究動向の把握に努めた。この研究成果の一部が、学会誌に掲載された。また、研究成果の社会還元として長崎大学言語教育研究センター主催ワークショップ「外国語教育の新展開を目指して～日本語の活用と複言語の可能性」で講演を行った。さらに研究拠点事業(先端拠点形成)「自然言語の構造と獲得メカニズムの理解に向けた研究拠点形成」の研究成果が出版された。また、このプロジェクトの研究成果の一部が2025年アメリカ言語学会年次大会に口頭発表で採択された。

論文

1. Yoichi Miyamoto, Koichi Otaki, Chie Nakamura, and Noriaki Yusa (2024) "On the nature of operators in the grammar of L1 Chinese learners of L2 Japanese," Elena Babatsouli (ed.) *Multilingual Acquisition and Learning: An Ecosystemic View to Diversity* (pp. 529–555), John Benjamins.

2. 遊佐典昭(2024)「極小主義から見た第二言語獲得における論理的問題と発達問題」*Second Language*, 23, 37–53. The Japan Second Language Association.

研究発表・講演

1. 遊佐典昭. (2024)「理論言語学と外国語教育の接点」(招待講演)長崎大学言語教育研究センター主催ワークショップ「外国語教育の新展開を目指して～日本語の活用と複言語の可能性」長崎大学, 2024 年 7 月 27 日.
2. Chie Nakamura, Suzanne Flynn, Yoichi Miyamoto & Noriaki Yusa "Processing of wh-questions in L1 and L2: Cross linguistic evidence from eye-tracking" International Workshop 2024 on "International Research Network for the Human Language Faculty," Osaka University, Dec. 7, 2024.
3. Chie Nakamura, Suzanne Flynn, Yoichi Miyamoto & Noriaki Yusa. (2025) "Incremental or delayed processing? L2 learners' active gap-filling in sentence comprehension," 2025 LSA (*Linguistic Society of America*) Annual Meeting, Philadelphia, Jan. 10, 2025.

社会活動

1. 日本第二習得学会顧問
2. 国際学会・ジャーナル査読委員: Generative Approaches to Language Acquisition (GALA), The International Conference on Theoretical East Asian Psycholinguistics, Syntactic Theory and Research (STAR)

科学研究費の受領

1. 「遠隔授業は、英文法知識の獲得・定着にどのような影響を与えるのか?」(科研費: 挑戦的研究: 代表)

教育活動

『ことばと人間』『英語音声学』『Academic Reading』『英語学基礎セミナー』『生成文法』『卒業論文セミナー』を担当した。例年通り、全ての科目において、「ことばの気づき」を受講生が体験できるように講義を運営した。自分で問いを見つけ、その問いを言語化することができるような訓練を行った。過去に習った手持ちの材料を何度も繰り返し見つめることで、新しい視点が形成されることを体験できるように、担当科目全てを有機的に結びつける工夫をした。講義・セミナー科目の授業評価では、考えること

の楽しさが実感できたというのが一定数あり、今年度担当科目の目標は達成できたと思われる。

集中講義

1. 中京大学国際学部言語文化学科「言語学特殊講義」(2025 年 2 月 3 日～7 日)

増富和浩

研究活動

今年度も教育・研究以外の大学・学科運営に関わる業務にかなりの時間を奪われる状況が続いた。現在、英文学科のカリキュラムについて大幅な刷新と拡充を検討しており、従来の校務に加えてこれらの業務に相当な時間を費やすことになり、研究活動を行うことが制限されてしまった。毎年同じような状況をこの場で書かなければならないことは、誠に残念なことだと感じている。もちろん、将来に向けてのカリキュラムの見直し作業は、学科の教育活動に直結することであるので、その点では非常にやりがいを感じる業務であったことは確かであるし、学科全体で取り組んだ活動であるので、私だけに生じたことではないが、研究分野ごとに責任を負って取り組んだため、結果的には英語学分野のカリキュラム検討に相当な時間と労力を割くことになった。近い将来の教育内容が現在よりさらに充実していることを願っている。

他の学内業務としては、今年度はキャリア支援センターの副部長を担当し、英文学科だけでなく全学科・専攻の 4 年生の就職活動に関する支援業務を行った。入学生の確保、学生の教育とともに学生の出口戦略に関わることは大学教員として重要な業務の 1 つと考えているので、その意味で大変有意義な機会であった。合わせて、副部長として、ご父兄を招いての就職セミナーを開催・運営したこと、キャリア支援科目である「キャリアデザイン」のカリキュラム改定を主導したこと、キャリア形成の専門家の外部講師の先生方と交流の機会があったことなども大変有意義なことだったと感じている。

また、これら以外に、詳細を紹介することはできないが、大学全体の運営に関わる様々な業務等を仰せつかる機会がますます増えたため、研究活動に注力できる環境が少なくなっていくことを今年も痛感する一年であった。

以上のように引き続き教育・研究とそれ以外の業務のバランスに大きな変化はない(あるいはさらに厳しくなるかもしれない)状況であったが、定年退職までの時間も残り数年となってきたので、研究活動に一定の区切りをつけることもぜひとも行いたいと考えている。

論文

本年度の研究活動は上記のような状況であったため、具体的な論文等を示すことができず残念ではあるが、本報告が掲載される『英文学会誌』第53号に以下の論考を投稿させていただいた。現在準備中の論文もあるので、2025年度に学会誌およびその他の媒体で公表していく予定である。

増富和浩(2025)「定名詞句の解釈と統語構造との関係：語彙的緊密性の観点からの試論」『英文学会誌』第53号, pp.13-28.

社会活動

今年度も引き続き、日本英語英文学会と日本英語学会の評議員を務めており、総会および役員会を通じて当該学会の運営に携わった。また、本年度も、オープンキャンパス等を利用し、高校生に対して進学することの意義や大学で学ぶことの魅力を伝える活動を行った。

教育活動

英文学科のカリキュラムのうち、英語学コースの科目を主に担当した。例えば、3年生対象の「英語学基礎セミナーⅠ・Ⅱ」、4年生対象の「卒業研究セミナーⅠ・Ⅱ」のゼミ科目では、コロナ禍以降、現在では日常の教育ツールとなった Zoom やマイクロソフト Teams 等の遠隔支援ツールのメリットも活用しながら、英文レポートや卒業論文の添削指導などを効果的に行うことができた。また、教職免許の取得を目指す学生が再び増えてきたことを踏まえて、1、2年生の Grammar の授業では、「英文法の知識を教育現場でどう生かすか」ということを意識させながら授業を展開し、学生の学習意欲を喚起することができた。今年度の卒論ゼミの学生のうち3名が教育実習を行い、そのうち1名が教員採用試験にも合格し、2025年度4月から中学校英語科教員として教壇に立つこととなった。大変喜ばしいことである。

清水菜穂

研究活動

2024 年は、これまで長く研究に携わってきたアメリカ黒人作家 James Baldwin の生誕 100 年という記念すべき年であった。*The New York Times* 誌をはじめとして各メディアでは彼の特集が組まれ、新たな Baldwin 批評や研究も刊行されたため、それらの収集と分析に時間を費やす 1 年となった。また、生誕 100 年にまつわる寄稿文の依頼もあり、代表作すべての再読も試みることができた。これを機に、これまで発表してきた論文や雑文等に新たな視点に基づくものも加え、できれば来年度末くらいまでにひとつにまとめた形にして刊行すべく、現在取り組んでいる。

エッセイ

「James Baldwin 生誕 100 年に寄せて」『東北アメリカ文学研究』第 48 号(2025 年 3 月 31 日)

社会活動

多民族研究学会(MESA)大会運営委員長

教育活動

今年度は「卒業研究セミナーⅠ・Ⅱ」、「卒業論文」、「アメリカ文学史Ⅰ・Ⅱ」、「アメリカ文化史Ⅰ・Ⅱ」、「英米文学講読(小説・批評)Ⅰ・Ⅱ」および大学院の「米文学演習Ⅰ・Ⅱ」、「英米文化論特殊講義Ⅰ・Ⅱ(文化論)」を担当させていただいた。

「アメリカ文学史Ⅰ・Ⅱ」と「アメリカ文化史Ⅰ・Ⅱ」では、昨年までの「より広く」から「より深く」へと目標を変え、それぞれいくつかの小テーマに分けて、できる限り深く考察を進めていくようにした。「英米文学講読(小説・批評)Ⅰ・Ⅱ」では、とすると「文学を読む」のではなく「英文法の解説」の授業になりがちなこれまでの経験を反省し、できるだけ受講者が作品世界に入り込めるように留意した。結果的に 3 回のミニ・エッセイが予想以上にすぐれたものが多く、授業を担当する側としては嬉しいことであった。「卒業研究セミナーⅠ・Ⅱ」と「卒業論文」における卒論作成については、例年通り多様なテーマが出そろい、最終的に全員無事提出にこぎつけた。「研究」の意味や方法を理解するのに困難を感じる受講者が例

年より増えているような印象を受け、4年間の集大成としての卒業論文の指導の難しさを改めて感じた次第である。大学院の授業では、1年次・2年次各1名の院生とともに非常に研究意欲が高く、論文執筆も順調に進み、指導する側も教えられることが多かった。

今年度は、近年の生成 AI や翻訳アプリの発展に対し、授業を担当するうえでどのように対応すべきか模索し続ける1年だった。作品分析の際の「自分自身の力で」読解し分析することの重要性、時間がかかってもそうすることが学問研究の面白さにつながることを、などをどのようにして伝えることができるか、と悩みながら1年を過ごしてきた。まだ答えは出ていないが、これからも自分自身の宿題として考え続けていきたい。

Timothy John Phelan

研究活動

In my second year at MGU, I expanded my research activities while continuing to balance teaching responsibilities. A highlight of the year was delivering presentations on various topics and venues. In March, I was invited to Hungkuang University in Taichung, Taiwan, where I conducted two workshops on language learning and Japanese culture. These international engagements provided valuable opportunities for cross-cultural academic exchange.

In July, I delivered a keynote address at a forum organized by the Society for Future Japanese Language Education. The presentation addressed timely questions about the intersection of artificial intelligence and language education.

The year concluded with a presentation for MGU's Christian Studies Lecture Series, where I examined the Shimabara Rebellion (1637–38) from a 45-year retrospective viewpoint. (My undergraduate thesis was about the rebellion.) This presentation reflects my continuing interest in exploring the historical dimensions of Japanese Christianity.

口頭発表

Timothy Phelan (March 26, 2024) 依頼講義 “English Language Workshop #1: Language Learning.” Hungkuang University, Taichung, Taiwan.

Timothy Phelan (March 26, 2024) 依頼講義 “English Language Workshop #2: Japanese Culture.” Hungkuang University, Taichung, Taiwan.

ティモシー・フェラン（7月24日2024年）「AI時代における第二言語学習の課題と革新」基調講演 フォーラム「コミュニケーションの多様性：デジタル時代のインパクト」日本語教育未来学会主催

ティモシー・ジョン・フェラン（12月13日2024年）「島原の乱(1637-38年）：45年後の歴史的考察」宮城学院女子大学キリスト教センター主催
第4回キリスト教講座

社会活動

大学英語教育学会（JACET）の東北支部長

教育活動

宮城学院女子大学国際交流委員会 委員長

宮城学院女子大学キリスト教文化研究所 所員

As chair of the International Relations Committee, I facilitated several significant developments in MGU's international relationships. In August, I helped organize opportunities for MGU students to attend Hungkuang University's summer program, personally participating in evaluating the program and laying the groundwork for formal cooperation. These efforts culminated in hosting the head of Hungkuang University's international center in October and assisting in establishing a formal inter-university exchange agreement in December.

My second year of teaching at MGU continues to be one of learning and adaptation. While I am still discovering the most effective approaches for our small class sizes, I have embraced new teaching challenges, such as leading my first junior seminar of 14 students and teaching American music history to MGU high school students. Teaching English majors and graduate students has been particularly rewarding due to their motivation and desire to improve. Beyond the classroom, I have enjoyed participating in various aspects of campus life, including attending chapel services and observing our students during their internship at the Royal Park Hotel.

酒井祐輔

研究活動

昨年度に取り組んだ研究成果について論文にまとめ、『東北ロマン主義研究』に掲載する機会をいただいた。また、今年度に執筆した複数の原稿については次年度以降、順次発表される予定である。8月から9月にかけては海外研修の引率としてイギリス、ロンドンに3週間滞在したが、この間、グローブ座(Shakespeare's Globe)、帝国戦争博物館(IWM London)、ストラトフォード＝アポン＝エイヴォン、イーストサセックス州ロドメル等を調査したほか、大英図書館で資料収集を行った。11月に日本ヴァージニア・ウルフ協会第44回全国大会(於福岡大学)、12月に日本英文学会東北支部大会第79会大会(於弘前大学)等の学会・研究会に参加し、質疑応答等を通じて有意義な意見交換を行うことができた。

論文

“On the Possibility of Knowing a Passerby: ‘Society’ in *The Prelude*, *Jacob's Room*, and *Border Country*”『東北ロマン主義研究』第11号、2024年7月、39-58頁。

研究ノート

「グローブ座へのアクセス——『アントニーとクレオパトラ』(2024年夏、シェイクスピア・グローブ座)」『英文学会誌』第53号、2024年3月、29-46頁。

社会活動

1. 日本英文学会 大会準備担当書記
2. 東北ロマン主義文学・文化研究会 会計
3. 日本ヴァージニア・ウルフ協会 出版企画編集委員

教育活動

英文学科内では4年生対象の「卒業研究セミナー」、3年生対象の「英米文学・文化基礎セミナー」では、学生独自の着眼点を活かして議論を発展させることができるような助言・指導を行うよう心掛けた。2・3年生対象の、「英米文学の世界(15-18世紀)」および全学教育の「リベラルアー

ツ基礎」ではシェイクスピアの演劇を題材とし、授業に LMS (Microsoft Teams) を使用したコメント課題提出とディスカッションを取り入れた。昨年度に続きアクティヴ・ラーニングを取り入れたことで、受講者の関心や学年などに応じて課題内容を調整する必要があることが見えてきた。

1・2 年生対象の「Intensive Reading」では、専門の授業への接続を意識し、受講者がつまづきやすい単元にしばって集中的に解説・問題演習を行うようにした。

山口晋平

研究活動

今年度は日本英文学会東北支部のシンポジウム「児童文学と汎用性」にてナサニエル・ホーソーンの *A Wonder Book for Girls and Boys* という作品を扱う口頭発表を行った。子供たちに神話を語る青年というフレームナラティブの構造に注目し、本作品をメタフィクションとして解釈した上で、ホーソーンの作家としてのアイデンティティを形成するための作品として位置づけた。ホーソーンは生涯自分が作家であることに葛藤を抱き意義を問いつけていた。本研究を含め、そういったホーソーンの葛藤が彼の多くの作品の様々な表象の中に表れていることを今後も追求していければと考えている。

学術論文

山口晋平「ホーソーンの作家としての可能態——*The Scarlet Letter* における歪な身体」『英文学会誌』第 52 号、宮城学院女子大学学芸学部英文学科、2024 年 3 月

書評

『改革が作ったアメリカ——初期アメリカ研究の展開』（佐久間みかよ・橋川健竜・増井志津代、小倉いずみ編著）『フォーラム』30 日本ナサニエル・ホーソーン協会、2025 年

口頭発表

山口晋平「子供と大人の境界線を越える——ナサニエル・ホーソーンの *A Wonder Book* における脱構築的試み」シンポジウム「児童文学と汎用性」

2024 年度日本英文学会東北支部第 79 回大会(於：弘前大学)、2024 年 11 月

社会活動

- ・日本ナサニエル・ホーソーン協会役員 資料室担当
「資料室だより」『NHSJ Newsletter』42、2024 年
- ・日本英文学会東北支部大会準備委員

教育活動

今年度は「基礎演習」や「英米文学・文化研究セミナー」といった授業の中で文学に限らず様々なメディアを通して物語というのがどのように描かれるのかといった問題を扱ってきた。例えば近年議論の対象になり始めたアダプテーションを扱い、同じ物語でも文字や映像という媒体の違いによって描かれ方が異なることを説明し、それぞれのメディアにどのような特徴があるのかを理解してもらうことに専念した。物語がメディアによって様々な様相を呈していることを知ることで、ただプロットを受容しストーリーラインを楽しむだけに留まらず、もう一歩先の「何故そのような表現になったのか」「原作とアダプテーションの間の差異にはどのような意図が隠されているのか」といった問題を学生自身で設定し、答えを見つけ、視野を広げて作品を楽しんでもらえるように努めた。

また「英米文学の世界(19-20 世紀)」といった文学の授業ではホーソン、ショパン、ロンドン、ヘミングウェイといったアメリカ文学の有名な作家の短編作品を通してそれぞれの時代におけるアメリカの文化的背景から作品を分析することを中心に行った。学生たちも文学を分析すること initially は慣れていなかったが次第に自分で問いを生み出し、議論の入り口に立つことができるようになっていたと思われる。こうした授業を通して文学に限らず社会に遍在するテキストに対して多様な見解の可能性を見出す力を伸ばしていってもらいたい。

Jennifer Green

研究活動

This year I finished up two research papers that I have been working on from the previous year. I published one research article for the OnCUE Journal about knowledge of and encounters with English profanity for Japanese learners. There is little research in this area of study despite profanity playing a prolific role in the English language and in English social interactions. I also published an article together with Sanae Fujisaki from Miyagi Gakuin Women's University's Education Department for the Critical Thinking and Language Learning Journal. We showed the results of a curriculum we developed teaching critical reading skills in order to develop critical thinking and writing skills in English writing classes while allowing use of AI in the writing process. Research related to teaching critical thinking in all areas of academia is already and will continue to be imperative in a world where AI is integrated into daily life.

I have also continued as an officer with and gave several presentations for the JALT and JACET academic societies this year. In February, I presented with Amanda Gillis-Furutaka from Kyoto Sangyo University on English profanity regarding how it functions in the brain and its relation to Japanese EFL learners in Kumamoto at the Sojo University Teaching and Learning Forum. Then in May, I presented with Sanae Fujisaki about our research together in Fukui at the PanSIG 2024 conference. I also gave three other presentations in Sendai, one for JACET, and two for JALT. In addition to giving presentations, I worked with both JACET and JALT as an officer helping to plan out conferences throughout the year.

口頭発表

Gillis-Furutaka, A. & Green, J. (2024, February 2). *Profane language in the brain and in the language classroom* [Conference plenary presentation]. Sojo University Teaching and Learning Forum 2024, Kumamoto, Kumamoto, Japan.

Fujisaki, S. & Green, J. (2024, April 21). *Critical thinking in academic papers with and without ChatGPT* [Conference presentation]. JALT Sendai: The Write Way, Sendai, Miyagi, Japan.

Fujisaki, S. & Green, J. (2024, May 25). *Critical thinking in academic papers with and without ChatGPT* [Conference presentation]. JALT PanSIG 2024, Fukui,

Fukui, Japan.

Green, J. (2024, June 15). *Critical thinking and AI-assisted English essays* [Conference presentation]. JACET Tohoku Branch 2024 Spring Conference, Sendai, Miyagi, Japan.

Gillis-Furutaka, A. & Green, J. (2024, July 28). *Profanity, EFL learners, and the EFL classroom* [Conference workshop]. JALT Sendai: JALT x JALT Mind, Brain, & Science SIG, Sendai, Miyagi, Japan.

Gillis-Furutaka, A. & Green, J. (2024, July 29). *F@*#!: Taboo words in English* [Public lecture]. Miyagi Gakuin Women's University, Sendai, Miyagi, Japan.

Green, J. (2024, December 8). *Do Japanese EFL Learners Know English Profanity?* [Conference presentation]. Tohoku ELT Expo 2024, Sendai, Miyagi, Japan.

教育発表

Fujisaki, S. (2025). Nurturing Japanese university students' critical thinking and critical writing in English academic writing classes. *Critical Thinking and Language Learning Journal*, 11 (1), 1–36.

Green, J. (2025). Japanese EFL learners' knowledge of and encounters with English profanity. *OnCUE Journal*, 14 (1), 3–26.

教育活動

This year, my focus has been on honing in on how to best allow for generative AI use in writing classes as a helpful editing tool while disallowing its overuse. In my writing classes this year, I included one lesson dedicated to explaining what generative AI is, how it can be used and abused, what the limitations of AI are, and my expectations on acceptable usage of AI in my classes. I allowed use of AI as a brainstorming tool during initial writing, but did not allow any generation of English or translation of their writing to English until the first draft of essays had been completed. After that, students were allowed to use AI as a proofreading tool and to help them develop the ideas that they had already written about for their final drafts with the knowledge that the content of the essay needed to stay the same with minimal additions of any new information. Students were also warned to use English in their essays that they and their classmates could understand since they presented their essays to the class at the end of the semester. With this strategy, students were able to focus on the content

of their essay more than on perfect English structure during the initial writing stage knowing that they would have AI support to perfect their English writing. At the same time, keeping to English that they and their classmates could understand made them confident in the final products of their writing.

In July, I held a public lecture at the university with Amanda Gillis-Furutaka aimed at explaining English profanity to language learners in Japan. Our goal was less about teaching swear words themselves and instead focused on what English profanity is, who uses it, and how it is used. Since Japanese and English profanity function differently, understanding the basics about the pragmatics of using English profanity is a vital step to understanding this area of the English language. In the future, we hope to hold more such presentations together and to continue this area of education and research.

2024 年度開講 英文学科講義題目

📖 英文学科専任教員 📖

吉村典子

Academic Reading
Overseas Study Preparation
Overseas Study
イギリスの生活と文化
イギリス文化史
英米文学・文化基礎セミナー
卒業研究セミナー

遊佐典昭

Academic Reading
ことばと人間
英語音声学
生成文法 (2 年生)
英語学基礎セミナー
卒業研究セミナー

増富和浩

Grammar (1 年生)
Grammar (2 年生)
生成文法 (3 年生)
英語学基礎セミナー
卒業研究セミナー

清水菜穂

英米文学講読 (小説・批評)
アメリカ文化史
アメリカ文学史
卒業研究セミナー

Timothy John Phelan

Speaking (1 年生)
Speaking (2 年生)
Listening & Vocabulary (2 年生)
Academic Writing & Presentation
英米文学・文化基礎セミナー

酒井祐輔

Intensive Reading (1 年生)
Intensive Reading (2 年生)
Academic Reading
Overseas Study Preparation
Overseas Study
英米文学の世界 (15-18 世紀)
英米文学・文化基礎セミナー
卒業研究セミナー

山口晋平

Intensive Reading (2 年生)
Academic Reading
英米文学の世界 (19-21 世紀)
英米文学・文化研究セミナー
英米文学・文化基礎セミナー
卒業研究セミナー

Jennifer Green

Speaking (2 年生)
Writing (2 年生)
Reading Activity (1 年生)
Reading Activity (2 年生)
Listening & Vocabulary (2 年生)
Academic Writing & Presentation

アメリカの生活と文化

英語学研究セミナー

☞ 非常勤教員 ☞

有光秀行

英米文学・文化研究セミナー

越川芳明

英米マスメディア論

飯味千秋

英米文学講読（詩・演劇）

後藤 斉

コーパス言語学

植松靖夫

イギリス文学史

英米文学・文化研究セミナー

島 越郎

Grammar（1年生）

Grammar（2年生）

奥田 育代

外国語としての日本語

鈴木 渉

英語科教育法（2年生）

金子義明

Grammar（2年生）

英語学研究セミナー

高橋久子

Intensive Reading（1年生）

菅野幸子

文化交流論

英米文学・文化研究セミナー

野村忠央

英語の歴史

木村春美

英語学研究セミナー

英米文学・文化研究セミナー

那須川訓也

社会言語学

英語学研究セミナー

木山幸子

心理言語学

語用論

福地和則

英語教材研究

英語科教育法（3年生）

小泉政利

日英語対照研究

心理言語学

藤崎さなえ

Intensive Reading（2年生）

星かおり

Intensive Reading（1年生）

Barry Kavanagh

Speaking (1 年生)

Speaking (2 年生)

Darren Kinsman

Speaking (2 年生)

Writing (2 年生)

Emily MacFarlane

Writing (1 年生)

Jerry Miller

Speaking (1 年生)

John Wiltshier

Speaking (2 年生)

Reading Activity (1 年生)

Reading Activity (2 年生)

Listening & Vocabulary (1 年生)

Academic Writing & Presentation

Overseas Study Preparation

Overseas Study

英語教育 (TESOL)

イギリスの生活と文化

Lee Mark Salmon

Writing (1 年生)

Academic Writing & Presentation

Matthew Wilson

Discussion Seminar

文化研究 (オーストラリア・カナダ)

Tomomi O'Flaherty

Writing (2 年生)

2024 年度 英語英米文学専攻講義題目

☞ 指導教員 ☞

清水菜穂

英米文化論特殊講義 (文化論)
米文学演習

Timothy John Phelan

英語アカデミックライティング

吉村典子

文化論演習
修士論文演習

2024 年度 卒業論文題目

※ 遊佐ゼミ (英語学)

熊谷 理沙 ……The Derivation of Cleft Sentences from Pseudo-Cleft Sentences

桑原 沙希 ……Universal Grammar in Second Language Acquisition

柴田 歩香 ……Why are Unaccusative Verbs Difficult?: Insights and Solutions for Japanese Students

千葉ありさ ……Passive Unaccusative Phenomena and the Auxiliary Selection Hierarchy in Second Language Acquisition

花田 遥菜 ……An Exploration of Non-Finite Verbs with a Focus on Participles and Gerunds

安田 萌乃 ……Heavy NP Shift and Extraposition in English Education

※ 増富ゼミ (英語学)

柿崎 成保 ……Structural Magic: A Morphological Analysis of Spells in the *Harry Potter* Series

亀谷 桜里 ……Cultural Gap in Subtitles: Personality Differences between America and Japan

菊池 音羽 ……An Analysis of the Semantic Extension of the English Preposition *ON* from Its Core Meaning

森 葉月 ……How to Acquire the Usage of *Get* Based on Patterns of Semantic Derivation from a Figurative Perspective

※ 吉村ゼミ (英米文学・文化)

村上 奈緒 ……日本における男女格差の問題と解決策 —スウェーデン、アメリカ、韓国との比較を通して—

- 安藤 寧々 …… Queen Elizabeth II's Fashion: Its Role and Significance
- 猪狩 花那 …… ガイ・フォークス・ナイトの変容に見るイギリス祭事の役割
- 石津 真琴 …… イギリス人と住まい —ロンドンの住宅調査を通して—
- 大内 風沙 …… British Slavery: Historical Content and Royal Involvement
- 佐藤 萌 …… 17～19 世紀イギリスにおける茶文化の形成と社会的影響
- 関 歩未 …… イギリスと日本の女性使用人 —比較と特質—
- 高橋 璃乃 …… ヴィクトリア朝の絵画と女性の悲劇 —時代を超えて愛される名画の謎—
- 遠山 愛理 …… クリケットの歴史 —イギリスからインド・オーストラリア・南アフリカへの広がりからみるグローバリゼーション—
- 三浦 志乃 …… The Relationship between People and Dogs in Britain
- 矢野ひかる …… カジュアルズ —英国のサッカー文化から現代ファッションへの影響と再解釈—
- 山本 朔楽 …… 日本の教育現場における芸術文化の現状と求められる役割 —英国との比較を通して—
- 若山依紗子 …… 英国酒文化にみる社会階級と記号
- 渡邊 史歩 …… Pubs in Britain: History and Attractive Features

※ 清水ゼミ (英米文学・文化)

- 浅野 帆南 …… Advertising and Purchasing Behavior in American Society
- 猪俣 桃香 …… ファストファッションの裏側
- 小野寺 凜 …… ハリエット・タブマンの生涯
- 川村 理子 …… Atomic Bomb: The Differences Between American and Japanese Views

- 黒川 莉那 …… The History of Hollywood: Its Birth to Digital Era
- 佐藤那奈佳 …… American Nativism: Know Nothing, Ku Klux Klan and
White Supremacy
- 佐藤 里紗 …… ブロードウェイ・ミュージカルとアメリカの危機
- 下田麻梨乃 …… American Obesity and Poverty: Based on Food and Exercise
of Children and Adults
- 田原 捺季 …… The History and Transition of Japanese Americans in Little
Tokyo
- 千葉 望央 …… Compulsory Education and School Life in the U.S.
- 樋沢 依吹 …… アメリカ女性の社会的地位の変遷
- 萩野 花香 …… Women and Diverse Society in American Advertising
- 細川 晃菜 …… The Brave Life and Thought of Jacqueline Kennedy
- 本田 理々 …… Inferiority of Black Women and Family Background: Com-
parison of the Two Girls in Toni Morrison's *The Bluest Eye*

★ 酒井ゼミ (英米文学・文化)

- 能登 明子 …… 老いをいきるということ——『ダロウェイ夫人』が描く
孤独への葛藤と受容——
- 菅野 唯 …… The Insanity in the Innocence of a Child in “Sredni Vashtar”
- 藤本 舞音 …… From *Mansfield Park* to *Dracula*: Memory, Memories and
Records

★ 山口ゼミ (英米文学・文化)

- 大宮 凛菜 …… 登場人物の運命とオオカミ —*White Fang* におけるオオ
カミが持つ役割
- 草野 有香 …… リックから読み解く人間の本質とケアの倫理
- 國井 朱里 …… 色と音が伝えるもの —*The Great Gatsby* の世界で

熊谷 琴子……『ライ麦畑でつかまえて』に見るホールデンの「再生」
への旅路

黒木 菜帆……*The Bluest Eye* に描かれる白人の優越性がもたらす影響
について

田中 凜子……『グレート・ギャツビー』におけるニック・キャラウェイ
を二重性から読み解く —語り手として登場人物として

中鉢 遥香……*The Great Gatsby* における東部と西部の隔たり —1920
年代のアメリカから見えてくるもの

本庄ななか……*Little Women* における新たなジェンダー観 —模範的な
女性像の展開

村井 彩乃……ニューランドの選択 —*The Age of Innocence* における二
人の女性間での葛藤

2024 年度 修士論文題目

(指導教員：清水・吉村・Phelan)

武田 紗輝……Queer Reading of Stepmother and Daughter Relations in Cin-
derella Story Films: *Rebecca* and *Cinderella*

英文学会活動報告

- 4 月 16 日 「はじめての TOEIC」(1 年生対象) 佐藤明宏氏
- 5 月 15 日 オンライン「はじめての TOEFL ITP テスト説明会」
小菅洋史氏
- 6 月 3 日～8 月 5 日
Student Teachers 主催「ESL サマースタンプラリー」
- 6 月 12 日 英文学科キャリア講演会
伊藤睦氏
- 6 月 26 日 声と話し方講座 1 年生コース
「伝える・伝わる声と話し方基礎講座」基礎編
赤間裕子氏
- 7 月 23 日 英文学科キャリア講演会
井上千保氏
- 9 月 4 日～6 日 仙台ロイヤルパークホテル インターンシップ



- 9 月 17 日～10 月 31 日
Student Teachers 主催「ESL ハロウィンスタンプラリー」
- 11 月 5 日 声と話し方講座 1 年生コース
「伝える・伝わる声と話し方基礎講座」展開編
赤間裕子氏
- 12 月 1 日～20 日
Student Teachers 主催「ESL クリスマススタンプラリー」

12 月 4 日～12 月 8 日

British Hills インターンシップ



12 月 11 日

英文学科キャリア講演会
清水美里氏

1 月 22 日

アメリカ祭り
(フェラン先生と清水先生のご定年を記念して)



English Certification

—私の勉強法—



私の英語学習法 in Canada

3年 大場 晶夢

TOEIC スコア：775

私は、昨年度のカレッジ TOEIC 受験後にカナダ留学をしてスコアアップすることができました。主にリスニングのスコアが大幅にアップしており、結果を見たときは信じられませんでした。常に英語を聞き、英語を話す環境にいたることができたからこそその結果だと思います。

カナダで生活するうえで、英語力を向上させるために取り組んだことは2つあります。1つ目はホストファミリーとたくさん会話し、ホストファミリーの行事に積極的に参加することです。私のホストファミリーは、毎週金曜日の夜はピザをテイクアウトし、皆で映画を観るという習慣がありました。もちろん映画は英語で話されているので、字幕を入れてもらってたくさん映画を見ました。サンクスギビングデイやクリスマスなどの行事にも参加し、親族の方々とも会話することができ、たくさんの生きた英語を楽しむことができました。また、私はホストマザーと一緒に毎週「バッチラー」を見ることをとても楽しみにしていました。自然体な会話文を聞くことができたことに加え、興味のある内容だったため、何のストレスも感じずに楽しみながら英語を学ぶことができました。

2つ目は通学中に音楽を聴かず、周囲の人の会話を聞くということです。客観的に考えれば良い行動と言い難いのですが、これこそが私の英語力を向上させたと考えています。カナダは多国籍国家なので、聴く英語も様々なアクセントで話されていました。カナダ英語はもちろんですが、ブリティッシュイングリッシュ、インド英語、アラブ地域の英語など、次第にどのアクセントの英語にも耳が慣れ、聞き取れるようになりました。カナダに到着した当時は店員さんの言葉も理解できなかった私ですが、最後に

は誰とでも会話を楽しめる程成長することができました。

また、留学が終わってからもカナダでできた友人たちと交流を続けており、たまにビデオ通話で英語を話す機会を作るように心がけています。これからこの縁を大切にしながら、もっと英語を楽しんでいきたいです。

私の英語学習方法

1 年 加成 遥菜

TOEIC スコア：675

TOEFL スコア：520

私が TOEIC と TOEFL のスコアアップのために実践した主な勉強方法を単語、文法、リスニングの三つの分野に分けて紹介します。

単語勉強では、TOEIC L&R 用の単語帳を利用しました。この単語帳はスマートフォンに専用のアプリを入れると音声を聞くことができるため、音声を聞きながら毎朝登校時間に 100 単語分ずつ取り組みました。

文法の勉強では英文法の本と、TOEIC の文法問題集を利用しました。英文法の本は前期の Grammar の授業で利用していたもので、毎日家で 2 ～ 3 ユニットずつ進めていました。文法の基礎が分かりやすく簡潔にまとめられていて、練習問題も多く載っているので、英文法を再確認したい方にお勧めです。また、同じ内容の英語版もあるので、英語が得意な方は英語版を試してみてもいいと思います。TOEIC 文法問題は、穴埋め式の文法問題が 1,000 問分掲載されたもので、毎日 20 分ずつ取り組みました。問題の中で分からない単語があったら調べ、専用のアプリで音声を利用するなどして語彙力とリスニング力の強化にも同時に取り組みました。

最後にリスニングの勉強方法です。リスニングの勉強では、無料のサイトを利用しました。このサイトでは幅広い分野の英語のスピーチをスクリ

プトと字幕付きで聞くことができ、私はこのサイトを利用してシャドーイングに取り組みました。シャドーイングとは、聞き取った英語を音が耳に入ってきた瞬間に真似しながら音読する勉強方法です。私は1週間に1つと動画を決め、最初はスクリプトを見ながら始めました。最後にはスクリプトを見ないで音読できるようになるまで、繰り返し練習しました。更に内容を理解するため、スクリプトを5つの文章に分けて日本語訳にも取り組みました。また TOEIC と TOEFL の試験前にはこれらの学習に加えて、TOEIC の公式問題集と、英文学科図書室にある TOEFL の問題集を繰り返し取り組みました。

私は言語学習において、毎日少しでも英語に触れることと、音声を利用して耳を英語に慣らしていくことが特に大事だと思います。

私の英語学習法について

1年 今野 愛海

TOEIC スコア：625

私は、英語を勉強するために日頃から2つのことを行っています。1つ目は、日常から英語を聞くことです。私は洋楽を聴くことが好きで、歌詞の意味も考えながら聴いています。また、音楽を聴くこと自体が好きなので、楽しみながら英語に触れることができるのがいい点だと思います。難しい単語が歌詞の中にある場合は和訳し、繰り返し聴いています。歌詞の意味を理解することで、曲自体も好きになれると同時に、楽しみながら英語を学べるところが最大の利点だと思います。また、映画やドラマを英語の字幕付きで視聴することも、リスニングの勉強になると思います。

2つ目は、英語のニュースを見ることです。私はテレビで、BBC ニュースや NHK JAPAN を見えています。この2つは、全て英語で話されています。

私はニュースの内容を全て理解できるまでにはまだ上達していませんが、現地のネイティブな英語を気軽に聞くことができるので、英語をリスニングするうえで大切なツールになっています。また、お金がかからず無料で始められるので、始めやすいのがメリットだと思います。BBC ニュースはイギリスの番組なので、イギリスに行く際には、BBC を聴くと良いヒアリングの勉強になると思います。テレビで映像があるので、話している事が分からない場合でも内容が入ってきやすいと感じます。さらに、英語のニュースを見ることで、社会情勢や時事問題についても学ぶことができ、知識も増えるので一石二鳥です。

これら2つのことは、英語を勉強したいと思っている人にとっては、誰でも気軽に始めやすいと思います。どのような形でも良いので英語を日頃から聞くことで、実際に海外に行く機会があった際に、環境に慣れやすくなると思います。また、ヒアリングをすることで、質問されたときやお店で店員さんの言葉を聞くときなど、役に立つと思います。英語を学ぶツールは沢山あるので、これからも自分に合った勉強法で、英語を上達させていけばいいなと思います。

English Certification A・B・C

「English Certification A・B・C」は TOEIC 等のスコアや英語関係の検定試験合格等により単位を認定する制度です。下記の英語検定が単位認定の対象となります。

	TOEIC	英検	TOEFL paper	TOEFL iBT	IELTS
English Certification A	600 以上 720 未満	2A 級	500 以上 550 未満	65 以上 79 未満	5.5 以上 6.5 未満
English Certification B	720 以上 830 未満	準 1 級	550 以上 600 未満	79 以上 96 未満	6.5 以上 7.5 未満
English Certification C	830 以上	1 級	600 以上	96 以上	7.5 以上

2024 年度 English Certification A で単位申請者：3 名

2024 年度 English Certification B で単位申請者：2 名

2024 年度 English Certification C で単位申請者：1 名

編集後記

2024 年度は
英文学科にとって
変革の入り口になっ
た年と言えるかもしれませ
ん。学科改組に向けた話し合いで
は、今の時代の英語やそれを取り巻く
学問の在り方を大きく見直す機会となりま
した。新学科のご縁もあり、現一般教育科の
間瀬先生には今回本誌にご寄稿頂いております。

また、木川編集委員には後期から再びお世話になる
こととなり、復帰早々学科運営においても多大なお力
をお借りしております。皆様のご尽力のもと本号をお届
けできましたこと改めて御礼申し上げます。

さらにフェラン先生と清水先生に置かれましてはご定年
を迎えることとなり、学期末に開催した「アメリカ祭り」
では楽しいお話や素敵な演奏でご活躍頂きました。私事にな
りますが、本イベントで先生方と音楽のお話やセッション
ができて、この日は私にとっても非常に楽しい一日とな
りました。英語や音楽を通して「人と繋がる」というこ
とを心より実感できるお二人の素晴らしいご講演は、
きっと学生の心にも響いたことだと思います。こ
の場を借りて御礼申し上げますとともに、お
二人の今後の更なるご活躍をお祈りして
おります。

編集委員 山口晋平

執筆者紹介

増 富 和 浩	宮城学院女子大学教授
酒 井 祐 輔	宮城学院女子大学准教授
間 瀬 幸 江	宮城学院女子大学准教授

編集委員

吉 村 典 子
山 口 晋 平
木 川 奈 緒

英 文 学 会 誌 第 53 号

発行	2025 年 3 月 10 日
編集	代表 吉 村 典 子
発行所	宮 城 学 院 女 子 大 学 学 芸 学 部 英 文 学 会 仙台市青葉区桜ヶ丘9丁目1番1号 電話 (022) 279-1331(代)
印刷所	宮 城 学 院 生 活 協 同 組 合 電話 (022) 278-1613